

読解能力の育成に資する 教材の選択と配列について

—— 特定領域集中型読解法によるドイツ語読解教育 ——

原 口 厚

キーワード：基本語彙／分野固有語彙／マシユー効果／目標テキスト／テキスト
間相互関連性／支援テキスト

0. はじめに

二、三年年次の学習者に対して適切なドイツ語授業を行うことは容易ではない。大きな理由の一つとしては、一般的に一年次の授業が「文法を中心とするシラバス」⁽¹⁾によって構成されているのに対して、二、三年次の授業は「概念を中心とするシラバス (notional syllabus)」に基づいて構成されることによって、往々にして両者の授業内容が構造的に乖離することが挙げられよう。一年次の主要目標は通常、ドイツ語の文法構造を理解させることである。文法の説明と練習問題に付随して行われる読解、作文、聞き取り、対話練習等も人称代名詞の格変化、現在完了形といった特定の文法項目を適用することを前提として構成されている。したがって学習者は基本的に当該の文法項目のみに集中することによって比較的容易にこれに対処、ないしはやり過ごすことができる。語彙についても一年次用の教科書は導入の順序等にも配慮した上で、比較的少

数の基本的語彙の枠内で完結するように作成されている。

これに対して二、三年次の概念を中心としたシラバスでは、読解の場合、小説、評論、論文、新聞・雑誌記事等から何らかのまとまった内容を有するテキストが教材として選定されることが多い。文法について言えば、とりわけ生テキスト (authentischer Text)⁽²⁾の場合、そこには一年次に順を追って少しずつ学習した文法項目が一斉かつ順不同に、そしてそれらが様々に組み合わせられて出現し、学習者はパニックに陥ることとなる。語彙についても、その選択は内容の伝達を主眼として行われ、更に文体上の技巧も加わることから、一年次に学習した程度の語彙では追いつかず、殆どの語彙を辞書で引くことを余儀なくされる場合も少なくない。そこでこうした乖離は、橋渡しに十分な配慮がなされない場合、内容的に良質のテキストを与えようという教員の善き意図を裏切って、学生の学習動機を減退させ、〈読むこと＝辞書を引くこと〉という不毛な読解観・学習観と〈学校で学習された無力感 (academic learned helplessness)〉 (Stanovich S. 389) だけを後に残すという不幸かつ皮肉な結果に終わることも少なくない。

一年次と二、三年次の接続の問題に対してはこれまでもこれを円滑化する対策は講じられている。複雑な文法構造や辞書に収録されていない語、内容理解の困難な語等についての注釈をつけることはその一例である。また辞書を引く負担を軽減するために、一年次で学習した以外の語彙の意味内容を口頭で、あるいは一覧表の形で学習者に事前に教えるという方法がとられることもある。しかし読解能力に限らず何らかの能力とは、そもそもこれを教員が完成品の形で与えることはできず、学習者が自ら組み上げるものである。教員は本質的な意味において「学習者の学習助言者 (Lernberater)」, ないしは「学習者の学習プロセスの監督 (Regisseur)」 (Bimmel S. 11) にすぎない。したがって教員に可能なのは、読解能力の形成に有効な学習の場と契機を準備し、提供することまでである。そこで読解の場合、未知の語意味を自ら獲得しつつ前進す

る能力もまた読解能力の不可欠の構成要素であり、その能力形成も基本的に学習者が自ら行うべき性質の問題である。そこで未知の語意味を完成品の形で教員が教えてしまうことには慎重でなければならない。したがって二、三年次の授業が内包する上のような問題に対しては、概念を中心とするシラバスに備わる利点を生かして学習者がテキストを読み進む中で、なるべく自力で困難を克服しつつ読解能力を形成できる何らかの体系的な支援策が必要であると考えられる⁽³⁾。

ことばの意味や価値、機能は多面的、重層的かつ複合的である。そこでその学習と運用もまた小論で述べるような技術的、実利的観点からのみ捉えられうるものではない。しかし何を目的としてであれ、外国語を習得し、これを円滑に運用しようとするに際しては、一定の技術性の習得が不可欠であることもまた否定できないであろう。そこで小論は外国語の学習と教育における事業計画ないしは作戦 (Operation) としての側面を注視し、こうした観点から二、三年次の読解教育における教材と授業方法の改善に資すると思われる戦術的可能性を探り、併せて一つの教材例と授業例を提示してみたい⁽⁴⁾。またそれに際しての諸前提、即ち今日の大学におけるドイツ語教育を取り巻く諸問題とドイツ語教育の目標設定については《原口1998》、読解プロセスについての認知心理学的知見並びに文法訳読法に代わる読解法と読解教育の戦略目標及びその戦術的方策等については《原口1999》、《原口2000》を参照されたい。

1. 問題点

1-1 文法訳読法の問題点

日本のドイツ語読解教育の場において〈文法訳読法〉は依然として広く行われている。しかし専ら文法と語彙の知識に依存してテキストを日本語訳することを目標とする文法訳読法は、テキスト言語学、認知心理学等に基づく読解プロセスに関する研究から見て特に次のような点で問題が多い。

- 1) 世界知識⁽⁵⁾の軽視
- 2) 世界知識と言語知識の相互作用の軽視
- 3) テクストの全体性の軽視
- 4) 種々の言語単位間のコンテクストの軽視
- 5) 辞書への過剰な依存と推論の軽視
- 6) 読解速度の低さと読解量の少なさ

日常的に経験するように、母語のテキストを読む場合でも、内容的に良く知っている事柄について書かれたテキストは読み易く、そうでない場合には理解が困難であるという落差が存在する。このことはテキストの理解は言語知識のみに基づいて行われているのではなく、テキスト内容に関する知識はもとより、世界についての多様な概念知識や一般常識、判断能力等がテキスト理解に深く係わっていることを物語っている。語や文はそれ自体に絶対的な意味内容が存在するわけではなく、他の語や文、テキスト全体、そしてその背後にある世界知識全体との相互作用の中でその意味内容が定まってくる。これに対して文法訳読法は、各語の〈訳語〉に基づき、その算術的総和として文の意味内容があり、更にその総和としてテキストの意味内容が存在するという一種の加算主義的テキスト観を前提としている。そこで読解作業の関心の中心となるのは〈文〉であり、これを独立して文法的に正しく訳すことが目標とされ、テキストの全体性と文や語相互間の関連にはあまり注意が払われない。このように語と語、語と文、文と文等の形成するコンテクストへの関心が低いことから、文法訳読法ではこうした言語単位の意味内容を前後関係等から考えようとする態度は乏しく、未知の語意味の獲得は専ら辞書に依存することとなる。そこで読解速度が低いことによって、一定時間内の読解量は少なく、読解経験も低い水準に留まることとなる。読解とは本来、言語知識のみならず、あらゆる知識・能力を総動員してこれらの相互作用の中で何らかの整合的世界を作り上げようとする一種の総力戦的な能動的意味構成作業である。これに対して文法訳読法

は、読解に際して使用する戦術が言語知識に大きく偏っていることによって、読解作業を語彙と文法の狭い枠内に矮小化し、〈完璧な〉文法の習得と辞書なしには何もできないという誤解を学習者に植え付け、テキストへの他の方法による積極的な働きかけを阻む原因ともなっている。

1-2 文法訳読法に代わる読解法とその問題点

今日では文法訳読法に対する反省に立ち、これに代わる読解法も徐々に行われるようになってきている。このような読解法には必ずしも統一的な方法が存在するわけではない。しかし共通の特徴としてはおおよそ次のような項目が挙げられる。

- 1) 世界知識の重視
- 2) 世界知識と言語知識の相互作用の重視
- 3) テキストの全体性の重視
- 4) 種々の言語単位間のコンテキストの重視
- 5) 辞書使用の相対化と推論の重視
- 6) 読解速度の向上と読解量の拡大

このような読解法はテキストの本来の読み方であり、母語や熟達した外国語でテキストを読むような場合に通常無意識のうちに行われている。文法訳読法が言語知識に著しく依存した読み方であるのに対して、このような読解法がテキストの理解にあたって基盤とするのは、世界知識と言語知識の相互作用である。テキストへのこのようなアプローチを比較的初歩段階の学習者に対する外国語教育の場でも積極的に活用することについては次のような利点を挙げることができよう。

まず第一に、テキストの理解に際して言語知識のみならず、その他の多様な手段を動員することにより、言語知識にかかる負担を軽減し、読解作業の必要以上の困難化と秘儀化を防止することができる。このようにテキスト理解にあ

たって多様な戦術を投入することは、第二にテキスト理解に際しての柔軟性を増し、リスクを低下、分散させることとなる。そしてこのことは同時にテキスト理解を多様な角度から追求し検証することにつながり、第三に読み手の思い込みや一面的な理解を牽制し、テキストに対する堅実かつ安定した理解を保証することとなる。そして最後に、このようにテキスト理解にあたって学習者の多様な既有知識や能力を肯定し、読解に対するその有用性を示すことは、文法訳読法の中で萎縮した学習者に対する一種の解毒剤としても有効であろう。

しかしこのような読解法も万能ではない。大きな理由の一つとして挙げられるのは、そこで中心的な役割を果たす推論にかかわる問題と制約である。ある語の意味内容が未知である場合、辞書に頼る前に世界知識とスキーマを下敷きとしたコンテキストの中で「基根語 (Stammwort)」⁽⁶⁾の意味内容の推測をまず試みるのが適切な手順である。しかしこうした方策が適切に機能するためには、「前提語 (Prämisse)」の意味内容が明らかでなければならない。これが未知である場合、ある語を基根語の前提語と判断すること自体がまず困難であることが多い。またある語が基根語の前提語であると同定できたとしても、その意味内容が不明である場合には、この語は実質的に前提語としては機能しない。したがって一般的には、いくつか存在する前提語の意味内容が一つでも多く既知である方が基根語の意味内容の推測は容易であり、これに有利に作用する。

しかしこれに対して一年次で90分の授業を50回程度履修した学習者が、大人を対象とした文学、評論、論文、新聞・雑誌記事といった二年度で通常使用される読解教材を読むにあたって、自由な推論を駆使するに足る十分な数の語彙が習得できているとは考えられない。米井は大学の一年次に学習する語彙数について、文部省の1989年以前の外国語についての学習指導要領をもとにして「一回90～100分の授業(=約6語の新語を習得)を週2回×年25～30回行うと考えると、一年間で約300～360語が習得される語彙数となる」と試算してい

る(米井 S. 65)。そしてこれに中学生と比較して大学生の学習能力が高いことを加味して考えて「この300~360語という語彙数をもう少し高く見積もることができることは確かである」(米井 S. 65)とし、更に語彙の教育に意を用いた授業を積極的にを行うことによって「学習されるべき基本語彙数は年間で二倍程度、即ち平均して600語程度に見積もることは可能と思われる」(米井 S. 66)としている。

したがって上に見たような世界知識と言語知識の相互作用と推論を活用した読解の方法それ自体は正しく有用であるとしても、これを二年次、三年次の読解授業にそのまま適用することは困難であり、更に何らかの追加的な支援策が必要であると考えられる。即ちテキスト内容に関するスキーマを活性化し、コンテキストや推論をフルに活用してテキストに揺さぶりをかけ、語意味やテキスト内容の理解を追求することによって読解能力を育成するためには、こうした方策と同時に他方で地道に言語知識の拡大強化にも努めるという困難なく二正面作戦が必要となる。そしてこの二つの要素が読解にとっていずれも不可欠であることを考えるならば、二、三年次の学習者を対象とした読解教育にあたっては、こうした二つの方向性を授業においてどのように統合して実施するかが重要な課題となるのである。

2. 語彙と読解

2-1 基本語彙の集中的導入教育

外国語を運用するにあたって語彙の知識は不可欠の要素であり、場合によっては文法的知識以上に重要な役割を果たすことは言うまでもないであろう。「学生が旅をする時には文法書ではなく辞書を持ってゆく」という Krashen のことば (Freudenstein S. 64)⁽⁷⁾はこうした事情を象徴するものである。日常生活と外国語の学習にはどれほどの数の語彙が必要なのであろうか。一例として次のような記述が見られる。

「……大学卒業者でさえ3000語以下の語彙で間に合わせている。会話では1000語以上は使用されない。……Konrad Adenauer は言わなければならないことを言うのに1000語以上を必要とすることは決してなかった。」

(Wortschatz S. 82)

一方外国語としてのドイツ語の場合、「日常生活のあらゆる場面で意志疎通がはかれる、確かなドイツ語の基礎知識が身につけていることを証明」するために行う「ドイツ語基礎統一試験 (Zertifikat Deutsch als Fremdsprache)」(Goethe-Institut) は約2000の語彙を想定し、そのための準備教材も概ね2000語を前提として作成されている (米井 S. 62 f.)。

またドイツ語学習用基本語彙集を編纂した Oehler は、その前書きで次のように述べている。

「このドイツ語基本語彙集はドイツ、アメリカ、イギリス、そしてフランスにおける半世紀以上に及ぶ言語統計研究の成果である。語彙の出現頻度に関する研究によれば次のことが知られている：ドイツ語の出現頻度上位1000語ですべての通常テキスト (Normaltexte) の語彙の80%以上をカバーすることができる。次の1000語でこれに続く8%から10%が、更に次の1000語で約4%が、更に1000語で2%が、そしてまた更に1000語で同様に2%を把握することができる。したがって上位4000語があらゆる通常テキストと日常会話の語彙の平均95%を形成し、これに続く4000語が約2%から3%をなし、残りのすべての語彙は1%から2%以下である。」(Oehler S. 3)

更に英語については、次のような記述が見られる。

「一般には、『テキストを理解するための条件は語彙の95%を既知語としてカバーすることで、そのカバー率には3,000語が必要』(Laufer, 1989, 1992) という報告があり、threshold level 3,000語説が支持されている。しかし、laufer の調査は、ほとんど追試もされないまま、多くの論文に引用されている。」(大学英語教育学会 S. 75)

こうした観点から山内は英語の語彙力と読解能力の関係について日本人の大学生と大学院生を被験者として調査を行い、次のような結論に達している。

「……日本人英語学習者の場合、TOEFLのような学術的な散文を読みその内容理解が（約57%以上）できるためには、2000語レベルが必要最低の語彙力である。今回の調査では、語彙レベルが上がるほど読解力も上昇する傾向があり、厳密な threshold level を特定することはできなかった。ただし、3000語レベルの語彙力をもつ9割程度（88.9%）の学習者がTOEFLのような学術的な散文を読みその内容理解ができることを考えると、語彙指導では、まず2000語レベルを習得させ、3000語レベルを目指すという手順が考えられる。したがって、3000語レベルは語彙の指導上の目標として位置づけられると考えられる。」（山内 S. 6）

以上のような各種の知見によれば、外国語を用いてある程度のことを行うためには少なくとも1000語から3000語程度の語彙は必要であるものと思われる。しかし一年次に習得される語彙数は、米井の試算に見られるように、理想的好条件のもとで考えてみても Oehler の掲げる1000語にも遠く及ばず、現在の授業条件の枠内で2000語ないしは3000語の基本語彙を導入することはほぼ不可能であろう。

こうした現実の中で二、三年時の学習者の語彙力不足の対策としてまず考えられるのが、文法等を幾分割ることによって生まれた時間で1000語から3000語程度の基本語彙を一年次に集中的に学習させて二、三年次の授業に備えるという方法である⁽⁸⁾。また場合によっては、自習用の語彙リストを配付し、これについての試験を行うことによって通常の授業とは別に基本語彙の習得を強制するという方策も考えられる。しかしこれらの方策は実現の可能性という現実的問題以前に、「語の意味内容はコンテキストとの関係が重要である」（Bohn S. 64）という語の意味内容とコンテキストの関係の原則から見てまず問題が多い。またこれを学習者が暗記することによって語彙の試験に合格したとして

も、こうした試験対処能力と実際のことばの運用は別であることから、〈習得〉した語彙が果してテキスト理解の場で実際に有効に機能するかどうかについても疑問の余地は少なくない。そして更に一年次での基本語彙の集中的導入教育という方策については、基本語彙の選定を出現頻度を中心とする基準によって行おうとする「普遍的有用性の基準 (Universalnützlichkeitsmaße)」(Scherfer S. 413) 自体に何よりも本質的な問題が存在する。

2-2 普遍的有用性の基準による基本語彙選定の問題点

Scherfer は普遍的有用性の基準によって基本語彙を選定するに際しての問題を次の三点から批判している (Scherfer S. 414)。

- a) どのような種類のテキストを使用し、多岐にわたるテキスト種の重要性をどのように判定するかという言語資料 (Korpus) の選択の問題。
- b) どのような単位を語として数えるかという問題。
- c) 基本語彙として採録すべき語と出現頻度が低いことから採録を見送らざるをえない語の境界を定めるにあたっての基準はどのようなものか。

a) について Scherfer は、従来の基本語彙リストの圧倒的多数が書きことばのテキストに基づいて作成されているのに対して、現代の外国語教育は口頭でのコミュニケーション能力を重視すべきであることから、話しことばの言語資料に基づくリストもより重視すべきであるとしている (Scherfer S. 414)。

a) については更に、同じ書きことばでも新聞の経済記事と園芸の解説書、話しことばでも政治問題についての討論番組とサッカー選手のインタビュー番組では内容上の相違から、そこに出現する語彙は大きく異なることが予想される。b) については Scherfer は、語の定義、慣用句、同義語の数え方等の問題がこれにかかわるとしている⁽⁹⁾。また c) について Scherfer は、フランス語の基本語彙集 (Français Fondamental) において、1063位までである出現頻度リストに dimanche (日曜日) が294位、samedi (土曜日) が516位、lundi (月曜

日)が580位, mardi (火曜日)が1009位, jeudi (木曜日)が1045位として採録されているのに対して, mercredi (水曜日)と vendredi (金曜日)は使用した言語資料に稀にしか出現しないとの理由で採録されていないという例によってこの問題を Raasch が説明していることを挙げている (Scherfer S. 414)。

更に言語資料に関連する別の根本的問題として Scherfer は, ある語彙が一つのテキストあるいはごく少数のテキストに頻出することによって「偶然的に高い出現頻度」となる可能性があることを「分布 (Verteilung)」の問題として指摘している (Scherfer S. 414)。

これらの諸点に加えて「あらゆる出現頻度分析において信頼が置けるのは構造語 (Strukturwörter)⁽¹⁰⁾を捉えることについてのみである。これに対して, テキスト理解や伝達にとって決定的重要性を有する内容的-, テーマ的領域においては訴えるところが少い」(Neuner S. 78)という指摘も重要である⁽¹¹⁾。そして更に受容に際してと発話に際してでは使用する語は異なる (Neuner S. 78)という点についてもまた考慮する必要がある。

以上のような問題点から, 普遍的有用性の基準に基づく基本語彙の選定についての次のような評価は当を得たものであると言えよう。

「外国語教育にとっての出現頻度調査の価値は, 議論の進展と共にますます懐疑的に評価されているように思われる。こうした調査方法には, 分析されるべき言語資料の選択のような多くの固有の問題が内在する。これに対して他の諸問題は出現頻度調査を補足ないしは補正する上で不可欠と思われる追加的調査の種類と数から生ずるものである。しかしそれはこうしたあらゆる努力を払ってもなお, 教育的-, 教授法的観点から熟慮すること (「矯正策」) なしには立ち行かないように思われる。これらのことから, 厳密な意味において普遍的有用性の基準は存在しえず, しかしそれにもかかわらず, —学習者グループに即した学習目標の決定にとってもまた—, 普遍的有用性の基準の考え方の枠内で開発されてきた種々の方法を使用することは

有意義と思われるのである。」(Scherfer S. 420)

そして更に、テキストの理解にとって有用な基本語彙の選定について考えるに際しては、比較的少数の基本的語彙によって通常のテキストを構成する語彙のかなりの部分がカバーできるという見解に対する次のような指摘もまた、常に銘記しておかなければならない。

「しかしこうした結果は、外国語の授業において狭く限定された語彙を習得すればそれでも非常に高度なコミュニケーション能力が獲得できるという誤った印象をしばしば引き起こすということをはっきりさせておかなければならない。ある言語の中で最も出現頻度の高い1000語が通常のテキストの語彙の約80%を形成しているという広く流布している命題から、こうした語彙だけを知ってさえいれば、すべてのテキストの80%は理解できる、あるいはすべてのテキストを80%理解できるという結論を引き出してはならないのである。」(Schumacher S. 46)

以上のような点から普遍的有用性の基準によって基本語彙を選定し、語彙力不足の対策としてこれを集中的に教育することは、原理的にも、またその実効性の点でも問題が多い。

2-3 学習者に対応した基本語彙の選定

上に見たような普遍的有用性の基準が内包する問題点から、近年では基本語彙選定の基準を拡大し、学習者に対応した基本語彙を選定する試みが行われている (Neuner S. 78)。Neuner はその中心にあるのは Mackey/Savard の導入した「通用範囲 (coverage)」(Mackey/Savard S. 72) の概念¹²⁾であるとし、これを構成する要素として次の五項目を挙げている (Neuner S. 78)。

- 他の語に対するある語の定義力
- 包摂力 (他の語を置き換える能力の度合)
- 展開力 (当該の語について可能な意味の定義の数)

—結合力（ある語が複合語、派生語の中に出現する頻度）

—使用可能性（学習者が慣れ親しんでいる具体的な使用の脈絡との結びつき）

そして更に Neuner は、学習者に対応した観点の体系化によって、基本語彙の選定にあたって言語体系に対応しがちの観点を拡大するためには次の三点が重要であるとしている（Neuner S. 78 f.）。

—有用性（Brauchbarkeit）—学習者グループの実用論的、言語的需要（テーマ／状況等）

—理解可能性（Verstehbarkeit）—起点言語、起点文化と目標言語、目標文化の接触領域

—学習可能性（Lernbarkeit）—外国語の語彙学習プロセスの特徴

〈有用性〉について問題となるのは「ある特定の学習者グループが外国語を使用する際に重要となる内容語（Inhaltswörter）を需要分析によって決定すること」であり、一例として「経済界で外国語を使用して働く秘書と観光客では重要とするテーマ領域がそれぞれ異なる」ことに見て取ることができる（Neuner S. 79）。そして〈理解可能性〉で問題となるのは「母語と目的言語の間の関係（類縁性の程度）と文化接触についての諸問題（近さ／隔たり／魅力、禁忌の領域等）」（Neuner S. 80）である⁽¹³⁾。また〈学習可能性〉においては、新しい知識の学習は常に既存の知識と何らかの関連をつける形で行われるという「こうした様々な連関を再認識することが記憶内での外国語語彙の受容、蓄積、活性化にとって明らかに大きな役割を果たす」（Neuner S. 80）こととなる⁽¹⁴⁾。

Schumacher は、Michéa, Pfeffer, Oehler が普遍的有用性の基準によって作成した三種類の基本語彙集の Landrieux による詳細な比較調査の結果に基づいて次のように述べている。

「構造語を超えてはごく限られた範囲でしか語彙の一致が存在しないことがそこに見て取ることができる。特に通常これらのリストのほぼ半数をなして

いる名詞については相違が非常に大きい。なぜならば名詞の出現頻度は使用された言語資料との結びつきがきわめて強く、その周知度が様々に評価されるからである。」(Schumacher S. 49)

こうした問題点に対する反省を踏まえて Schumacher は更に次のように指摘している。

「何らかのテキストに出現するパーセンテージが少しでも高い語を語彙リストの中に包括することは今日それほど重要ではない。むしろ目標は、特定の目標グループのコミュニケーション上の需要に対応する『最小限の言語 („Sprachminima“)』を開発することにある。……研究を新しく方向付けるに際しては、注意を語彙にのみ向けることには意味がないであろう。学習目標の定めるところに基づいて、選定された文法的基本構造と調和する最小限の基本語彙の選択を行わなければならないことが今日でははっきりと認識されている。」(Schumacher S. 50)

これらの指摘を考え合わせるならば、読解にとって有益な基本語彙を考えるにあたってまず第一に重要であるのは、あらゆる分野のテキストに有効な〈万能語彙〉を徒に追求するよりも、主として〈有用性〉の面から〈特定領域において有効性の高い語彙〉という考え方を取り入れることであろう。こうした観点から具体的な読解授業の設計を行うためにまず必要となるのは、語彙一般について考える前に、どのようなテキストを読むのかという具体的なテキスト種の選定を最初に行うことである。即ち、新聞を読もうとする場合でも、内容面からテキスト種を更に細分化し、政治、経済、社会、スポーツ等のどの領域の記事を読むのか、そして更にスポーツであれば水泳、サッカー、テニス等のどれについて読むのかを明確にすることによってはじめて、当該の個別分野の中で頻出し、したがってテキスト理解に有効となる〈分野固有語彙〉が浮かび上がってくるのである。

2-4 読解能力におけるマッシュー効果

読解力を形成するためには多読が必要であることは経験的に良く知られている。Westhoff もまた読解能力育成の実践上の指針として「学習者にできる限り多くの生の言語素材 (authentisches Sprachmaterial) を対面させよ」を掲げている (Westhoff S. 75)。その出発点となるのは次のような認知上の一連のメカニズムである。

「一般に推測されているところによると、人間は生まれた時から知覚を秩序付けようとしている。そして人間はこれを知覚の中に規則性を発見しようとすることによって行っている。……人間はこの種の規則性を、絶えず仮説を立てて、これを検証することによって発見している。こうして人間は単に非常に広範に及ぶのみならず、陰影に富んだ知識のあり方を蓄積するのである。」(Westhoff S. 75)

そこでこうした学習者の知識獲得方略を踏まえ、これに接続した形で外国語教育を行うために Westhoff は次のように述べている。

「教材は学習者にできる限り多くの仮説を立てさせ、これを検証することを可能にするものであることが望ましい。このことは即ち、読解教材は未知の事項と並んで十分に既知の事項を含んでいなければならないことを意味する。その結果外国語の読み手／学習者は既知の事項から出発して未知の事項に関して尤もな仮説を立て、これを検証することができるのである。簡単に言うと、読解テキストは難しすぎではなく、比較的『容易』でなければならない。それに加えて、差し当たり推測されたにすぎない規則性は、比較的短時間のうちに比較的頻繁に知覚されてはじめて、即ち学習者ができるかぎり多く読んではじめて規則性として認められるのである。そしてこのことを学習者はテキストが難しすぎない場合にのみ行うのである。」(Westhoff S. 75)

Stanovich もまた読解能力の形成に際して読解量の果たす重要性に着目して

いる。Stanovich は、新しい情報を獲得するに際して既存の知識ベースが重要であるという認知的発達に関する最近の知見の面から次のように述べている。

「……教育の領域においてマッシュー効果¹⁵⁾を引き起こすメカニズムの一つは、豊富かつ精巧に作り上げられた既存の知識ベースが更に学習を促進することである。専門的技術知識を身に付けている者はより大きな知識ベースを持っており、この大きな知識ベースはより大きな専門的技術知識をより速く獲得することを可能にする。」(Stanovich S. 381)

こうした基盤に立って Stanovich は教育におけるマッシュー効果の考え方を読解能力の問題に適用し、「読解におけるこれと相似的なマッシュー効果は、より発達した語彙力を持つ者がより良い読み手であるという事実から生まれる」

(Stanovich S. 381) とした上で、このような語彙知識と読解能力の相互作用の間には「『豊かな者がより豊かになる (“rich-get-richer”)』ないしは累加的有利性の現象 (cumulative advantage phenomenon)」(Stanovich S. 381)、即ち「読解におけるマッシュー効果 (Matthew Effects in Reading)」(Stanovich S. 380) が存在するとしている。そしてこのように豊かな語彙力が読解能力を誘発し、読解能力が語彙の拡大を導き、拡大した語彙がより効率的な読解を可能にするという形で語彙力と読解能力の間に展開する相互促進作用を「読解技能の発達について大きな個人差を引き起こす強力な自転的メカニズム (bootstrapping mechanism) に転化させる重要な媒介変数は読解経験の量である」としている (Stanovich S. 380)。

また Stanovich は、語彙力の発達は直接的な教授 (direct instruction) によってではなく、テキストの中で遭遇する未知の語意味を帰納的に学習することによって生起し、「読解は語彙力の発達の重要な貢献者」であるという点で諸研究者の見解が一致している (Stanovich S. 379) こと、更に、読解からの語意味の学習においては、より良い読み手がより多くの語意味を学習するという傾向があるという Nagy et al., Jenkins et al. の研究結果 (Stanovich S. 382) も

考え合わせ、読解におけるマッシュ効果のメカニズムについて次のように述べている。

「より良い読み手は、劣った読み手と比較して、書かれたことばに接する機会が多い。かくしてより良い読み手が習得する拡大された知識ベースは新しい語意味の帰納的理解をおそらく促進する。そして最終的に、より良い読み手は、劣った読み手の知識ベースが補償される場合でさえも、彼らが行う以上により効率的にコンテキストから新しい語を学習するように思われる。」

(Stanovich S. 382)

かくして十分な語彙を身に付けている学習者はこれによる多読の経験からより一層多くの語彙を獲得し、読解能力を更に伸ばすことができる。これに対して語彙の乏しい学習者は多読できないことによって語彙力も読解能力も伸ばすことができない。それでは語彙力も読解能力も十分ではない初歩的学習者が語彙力と読解能力の両面にわたる能力形成を起動し、これを着実かつ能率的に進展させるためにはどのような方策が必要であり、また可能なのであろうか。

3. 対策

3-1 特定領域集中型読解法

上に見たいくつかの知見から、二、三年次の学習者に対して有効かつ能率的な読解教育を考えるにあたっての出発点となるのは、学習者の持つ既存の知識ベースがテキスト理解にとってより有効な知識ベースとして機能する方策を講ずることである。これは更に次の二点に大きく分けて考えることができる。

- 1) テキスト理解に際して、学習者の身につけている世界知識が援用できる余地の大きい教材を使用する。
- 2) 学習者の〈くなけなしの〉言語知識を世界知識と結合させることによって、知識ベースのできる限りの拡大を図りつつ、難度の比較的低いテキストを多量に読み進める中で語彙の獲得と拡大を追求する。そしてこれを更なる

学習の中で既有的知識ベースとして機能させることによって、語彙力と読解能力が累進的に増大するような授業の進行を図る。

こうした観点から読解能力の育成にとって一つの具体的方策として有用であると思われるのが、世界知識が援用できる余地の大きい特定領域・問題に関するいくつかのテキストを集中的に読むような教材の選択・配列と授業設計を行うことである。小論ではこうした方法を〈特定領域集中型読解法〉と称することとする。即ち特定領域集中型読解法は、主として基本語彙選定についての〈有用性〉の観点に基づき、読解対象を限定することによってその中で語彙の獲得と読解能力の形成を行う一種の人工的な〈稽古土俵〉を準備しようとするものである。

Krashen もまた「初級、中級段階において、ただ一つの話題 (topic) 及び同一の著者によって書かれた何冊かの本についての読解を奨励することによって、学習者の第二言語習得歴の遅い段階ではなく早い段階で専門化を図ること」(Krashen S. 23) を “narrow reading” (Krashen S. 23) という名称の下に提案している。そしてその背後にあるのは「おそらく一般的に、狭いインプットが第二言語習得にはより効果的である」(Krashen S. 23) という考え方である。そして Krashen が narrow reading という読解教育法の裏付けとする次のような考え方は、〈多読による読解能力の形成を通じて語彙も同時に獲得され、両者は互いに相互促進作用を発揮する〉という点で Stanovich の主張とも合致している。

「narrow reading という方法は、構文と語彙双方の習得は多くの理解可能なコンテキストに触れることから生まれるという考え方に基づいている。即ち我々はメッセージ、多くのメッセージを理解する時に、そのメッセージをコード化している新しい構文や語彙を習得するのである。narrow reading はこうしたプロセスをいくつかの点で促進する。まず第一に、書き手にはそれぞれ好みの表現や独自の文体があり、話題 (topic) にもそれぞれ固有の語彙と論述

のスタイルがあるので、*narrow reading* はこれを学習者にいやでも復習させることができる。第二に、コンテキストに慣れ親しむことは理解を大きく促進し、その結果として言語の習得を推進する。ある一つの領域を読めば読むほど、読み手はその領域について多くのことを学び、その結果として当該の領域について読むことが容易となる。」(Krashen S. 23 下線は原口)

自然言語のテキストは、暗号のようにコードとメッセージの閉じた関係から成り立つのではなく、両者は開かれた関係にある。そこでテキストの理解には言語的知識のみならず、当該の問題についての専門的知識、世界知識といった非言語的知識が必然的に介在し、テキストの理解は両者間の相互作用の中で〈解釈〉という形で行われる。したがってテキストを理解するためには言語知識のみならず、多様な領域にわたる既有知識や能力等の一切を投入、関連させる総力戦的な創造的解釈能力が不可欠である。そこで当該の問題について十分な知識を有している場合には、テキスト内容を理解する上で未知の語彙や文法構造は必ずしも絶対的な障害とはならず、むしろ逆に内容的知識を基に言語知識を獲得することが可能な場合も少なくない。したがって読解教育には、既習の言語知識をもとにテキストを理解しようとする方向のみならず、逆に既有的概念知識を手掛かりとしてそこから言語知識の獲得を追求する「知識からことばへ」という方向性もまた不可欠であり(原口 2000 S. 60 f.)、この二つの方向性の相互作用が読解能力を形成し、これを促進すると考えられる。こうした観点から見て、複数のテキストのテーマを特定の領域・問題に限定することによって世界知識の活用を容易化する特定領域集中型読解法は、知識からことばへという方向性に大きく道を開くことを通じて読解能力の育成にまず貢献すると言えよう。

また普遍的有用性の基準によって基本語彙を確定することは、上に見たように、原理的に困難である。そこで有用性の高い基本語彙の選定は授業の具体的な目標設定、読解の対象とするテキスト種との関連等の中ではじめて可能とな

る。したがって読解対象領域を狭く設定し、これについての複数のテキストを読み進めた場合、必然的に各テキストに共通して分野固有語彙が頻出することとなり、これを当該分野についての基本語彙として集中的に学習することが可能となる。これによってテキスト内における既知の語彙の割合が上昇し、これを手掛かりとして未知の語彙の意味内容の推測も容易となる。そして更にこれを通じて、必ずしも分野固有とは言えない語彙の意味内容の獲得も可能となり、結果的に辞書を引かなければならない語彙の数が減少する。これらの一連の事象の総合作用によって読解速度が向上し、一定時間内での読解量も拡大する。以上のように特定領域集中型読解法は概念知識を大幅に活用してテキスト理解を行いつつ、これを通じて言語知識も拡大強化するという統合された〈二正面作戦〉を可能とするのみならず、両者間のマッシュ効果によって更に自力更生的な形で語彙と読解能力の累進的拡大を引き出すことも可能であると考えられる。

3-2 教材と授業の設計にあたっての留意点

上に見たような基本的考え方に基づいて実際の教材と授業を設計し、その効果をより発揮させるためには更に次の点に配慮する必要があると考えられる。

1) 到達目標中心方式と目標テキスト

ドイツ語教育が使用できる時間が僅かであることを考えるならば、一定水準の読解能力への到達をいかに能率的に行うかに意を用いなければならない。このことはまた学習者に達成感を与え、授業の説得力を向上させるという観点からも重要である。そのためにはまず到達目標が明確でなければならない。そして授業で扱う複数のテキスト間の内容的共通性を維持し、テキスト選定と授業進行の方向性を見失わないための注視点を設定し、目標への確実な到達を図るためには〈積み上げ方式〉ではなく、〈到達目標中心方式〉(原口 1998 S. 80 f.)を採用することが望ましい。そこで学習者に到達目標として最後にぜひ読

ませたい比較的長く、難度の高いテキストをまず最初にく目標テキスト (Zieltext)) として設定し、そこから逆算的に全体の教材の配列と授業展開を考えるべきであろう。またこうした比較的難度の高いテキストを最後に確実に理解できるように配慮することは、学習者がこれまでにドイツ語学習に費やした時間と労力が徒労ではなく、ドイツ語でかなりのことができるようになったことを証明するものであり、大学卒業後の人生の中での更なる外国語の学習と運用に自信と見通しを与えるという観点からも重要である。

2) テキスト間相互関連性と支援テキスト

従来の文法訳読法の基本的コンセプトは〈テキストを辞書で読む〉とするものであった。そこでは世界知識や推論の活用は副次的な扱いを受ける。これに対して、特定領域集中型読解法の基本的姿勢はポウグランドの挙げる「テキスト間相互関連性」(ポウグランド S.16)に基づき、〈テキストをテキストで読む〉とするものである。テキスト間相互関連性とは「ある一つのテキストの使用がすでに出会っている一つ、あるいはそれ以上のテキストについての知識に依存するようにする要因に関係する」(ポウグランド S.16) ものである。したがって目標テキストを理解するために必要となるのは、その理解に資する他のテキストであり、これを〈支援テキスト (Entlastungstext)〉として位置付け、その選定と配列に当たる必要があると考えられる。

もとより読解教育にあたって辞書の使用は不可欠である。しかしそこで必要なのは、未知の語を一語一語すべて辞書で調べるような勤勉性の指導ではなく、推論等の活用によって辞書で引かなければならない語を絞り込み、逆に一語でも少なく辞書を引いて間に合わせる能率的かつ有効な辞書使用の指導である。そこでテキストの選定と配列にあたっては、こうした観点からもまた、テキスト相互間に内容的、言語的な一定の重なりを与えることによって、実際に前のテキストが後のテキストを読むにあたっての手掛かりとして機能するように配慮しなければならない。

3) 易から難への配列

知識からことばへとという方向で獲得した言語知識を他のテキストの理解に投入することによって言語知識の蓄積、拡大を円滑に推進し、支援テキストの理解を通じて（部分的）目標テキストの理解を図り、こうした作業を何回か反復しながら（最終的）目標テキストへの漸進的到達を図るためには、当然のことながら短く容易なテキストから始めて、その長さや難度を徐々に引き上げて行かなければならない。そしてこれに際しての〈テキストの難度〉については、言語的観点のみならず世界知識の援用可能性等も含めた総合的観点から判断しなければならない。このように易から難へ向けてテキストの難度を少しずつ引き上げながら配列することによって、学習者は読解能力の向上を容易に自己確認することができ、このことは無力感、挫折感の防止と学習動機の維持、拡大という点においても有益であると考えられる。

4) 分節的構造と階層的構造

読解能力はある特定の話題、領域に限定されることなく、他の分野にも創造的に転用可能でなければならない。そのためには通年ないしは一 Semester の読解コースをいくつかの単元に分節化し、言語的、内容的な重なりを一定程度維持しながら、読解対象を少しずつずらして行く必要がある。このことはともすれば単調になりがちな読解コースの中で、内容的に変化を与えるという面からも重要である。授業に使用可能な時間数、学習者の能力、関心等に応じてテキストの選択と組み合わせを自由に変えることによって、単一の話題・領域を扱うだけの読解コースから、いくつかの話題・領域にまたがる複合的な読解コースまで任意の広がりを持つ読解授業を機動的に設計することが可能となる。また支援テキストに基づいて読む（部分的）目標テキストをいくつか用意し、これを更に上位の目標テキストに対する支援テキストとして機能させることによって任意の階層的構造を形成することも可能となる。

4. 教材と授業例

4-1 教材例

小論の最後に掲げた教材例の全体的構造は、付随する準備教材例と接続教材例も含めて下記の通りである。

準備教材例 1 : 〈出生率1.35 4年ぶり上昇〉

準備教材例 2 : 〈人口1億2691万人、伸び率最低〉

教材例

1. 人口動態シリーズ

1-1 導入編

① (支援テキスト1) : 〈Älteste Jpanerin gestorben〉



② (支援テキスト2) : 〈Wohnbevölkerung〉



1-2 平均寿命編

① (支援テキスト1) : 〈Lebenserwartung steigt〉



(導入編と平均寿命編の目標テキスト) : 〈Lebenserwartung leicht gesunken〉



1-3 小子・高齢化編

① (支援テキスト1) : 〈Anzahl der Kinder so gering wie nie〉



② (支援テキスト2) : 〈Kinderzahl so niedrig wie nie〉

- ↓
- ③ (支援テキスト3) : <Geburtenrate extrem niedrig>
- ↓
- ④ (支援テキスト4) : <Seniorenzahl übersteigt Kinderzahl>
- ↓
- (小子・高齢化編の目標テキスト) : <Überalterung schreitet voran>
- ⇓

1-4 離婚編

- ① (支援テキスト1) : <Scheidung ist o.k.>
- ↓
- ② (支援テキスト2) : <Rekord-Scheidungsrate>
- ↓
- (離婚編の目標テキスト) : <Jede hundertste Ehe wird geschieden>
- ↓

人口動態シリーズの目標テキスト1 : <Bevölkerung>

人口動態シリーズの目標テキスト2 : <Bevölkerungsentwicklung Deutschlands
bis zum Jahr 2050>

接続教材例 1 : <Ausländer und Mischehen>

接続教材例 2 : <Zahl der Motorradunfälle ist zurückgegangen>

本シリーズのテーマとして〈人口動態〉を選択したのは下記の理由による。
1) 近年日本では〈小子・高齢化社会〉の到来が喧伝されており、この問題について学習者の多くが概略的な概念知識を共有していると考えられる。

2) 人口動態に関するテキストは問題の性質上、多くの数値を含んでいる。テキスト内に現れる多くの数値は、学習者の既有的の言語的、非言語的知識と結合することによってテキストを理解する上での大きな手掛かりとなる。

3) 多くの数値が挙げられていることはまた逆に、推論等による仮説的なテキスト理解を自ら検証し、〈ウラをとる〉上での手掛かりとなる。

4) 人口動態に関するテキストにはまた統計に関する多くの語彙が含まれている。これらの語彙は人口動態に関するいずれのテキストにも頻出することによって、テキスト間での言語的共通性を維持しやすく、学習者に対して語彙面での負担軽減として機能すると同時に、反復的出現によってその学習と定着が図りやすい。

5) 統計に関する語彙、表現は人口動態に限らず他の分野のテキストにも出現することが多い。そこでこうした言語知識を習得し、これを数値、概念知識等と関連させながらテキストの理解を図る体験は他の分野のテキストの読解に発展的に転移が可能であると考えられる。

6) 今日のドイツ語教育の場においては〈自らの意見を自由に表明すること (freie Meinungsäußerung)〉の重要性がしばしば強調される。しかしある問題についての意見を責任ある形で表明するためには、当該の事象に関する概念知識が必要であり、これを欠いた〈自由な意見〉は往々にして単なる臆測や放言に墮する可能性を孕んでいる。そこで自らの意見を自由に述べることに異議はなく、その重要性を認めるにせよ、その一方で同時に当該の事象について正確な知識を獲得するためのドイツ語能力育成の努力もまた不可欠である。こうした観点から、具体的データを多く含み、影響が多岐に及ぶ人口動態に関するテキスト群を読むことは、その内容について自らがどのような立場をとるかについて考えさせる上で適切なテーマの一つであると考えられる。

7) 小中高齢化は日本に限らず、ドイツをはじめ先進産業社会に共通した問題である。そしてこれは政治、経済、社会、文化、国際関係等の多岐にわたって

巨大な影響を及ぼすものであり、数字に裏付けられたその実態を把握し、これについての現時点での自己の意見を整理しておくことは、今後の学生、社会人としての学習と諸活動にとって有用な一つの知識ベースとなりうる。

目標テキストとして掲げたドイツの人口動態に関するテキストは、一回に90分の授業を一年間に約50回程度、一、二年間学習した学習者にとっては必ずしも容易なテキストとは言えず、全文をいきなり日本語訳させた場合かなりの時間を要するものと思われる。そこで本教材ではこれを目標テキストとして設定し、学習者の既有知識を多く期待でき、その活用によって言語知識も獲得できる主として日本の人口動態についてのテキストを支援テキストとすることによってその理解の容易化を図った。そしてこれらの支援テキストを内容面から四つの〈編〉に分け、そのうちの三編ではこれを更に支援テキストと（部分的）目標テキストに分け、支援テキストの理解を通じて（部分的）目標テキストの理解を図り、これらについての内容的、言語的な総合知識をもとに（本シリーズでの最終的）目標テキストの理解を図るという三層構造の形で全体を編成した¹⁶⁾。

なお最初に導入編を設定したのは学習者の関心を喚起し、日本の人口動態についてのテキスト群を読む上での出発点的な共通知識を与えるためである。

〈Älteste Jpanerin gestorben〉のテキストは人名、〈geb. 1884〉、〈114 / 113 Jahren〉、〈die bislang älteste Frau Japans〉といった表現から、〈starb / gestorben〉が未知である場合もその意味内容の推測は容易であり、二、三年次の学習者であれば辞書なしでほぼ理解が可能である。そこで本テキストは関心を喚起するのみならず、こうした形で未知の語意味の推測が十分可能であることをまず実体験させ、自信を与えるという点からも冒頭に配置した。また次の〈Wohnbevölkerung〉のテキストは、これによって日本の現在の人口、男女比、老年層と若年層の人口比、近年の人口増加率が低いこと等がこれもほぼ辞書を使用することなく理解可能であることから、以後の支援テキストの支援テ

クストとして機能することを期して導入編に配置した。

テキストの教材化にあたっては、全体を訳読することなく重要な内容的知識を獲得するための足掛かりとなる質問を付した。また〈Lebenserwartung, Bevölkerung, durchschnittlich〉といった丸で囲んだ語彙は、人口動態、統計等の分野に固有と思われる語彙で、それまでに読んだテキストに既に出現しているものである。同一の問題、領域について書かれたテキストにおいては、語彙のにかなりの重なりがあることがこれにも見て取ることができよう。更に〈älter, jünger〉といった必ずしも人口動態、統計の分野に固有ともいえない多くの一般的語彙もまた各テキストに繰り返し出現しており、これも含めるならば語彙の重なりは更に増大すると考えられる。

実際の授業の実施にあたっては、授業時間数、学生の能力等に応じて本シリーズのみで読解コースを完結することも可能であり、またこれに関連するシリーズを編成して前後に配置することによって、更に広範な領域にわたるより高度な読解能力の育成を図ることも可能である。〈接続教材例 1〉はこうした場合に使用できるとと思われるテキストの一例である。日本に居住する外国人とその差別問題及び国際結婚を扱ったこのテキストは、内容的には日本の人口動態の一部について述べたものであるという点で人口動態シリーズと重なり、言語的には統計に関する語彙の面で人口動態シリーズとある程度の重なりを有している。また今日の労働力移動の国際化という背景の中で、外国人差別の問題等について知り、かつ考えることは学生にとって重要な課題であり、本テキストはその一つの入口ともなるであろう。

4-2 授業例

目標：ドイツの人口動態に関する目標テキストがそれぞれ20-30分程度で理解できる読解能力を形成し、支援テキストから得られた知見ももとに日本とドイツの人口動態の概要を比較理解する。

授業の手順と留意事項：

[1] 通年，あるいはセメスターの最後に読む〈最終目標テキスト〉を提示ないしは配付する。そのレベルについて説明し，このテキストが読めるようになることを到達目標として授業を進めることを明らかにする。

[2] 最初に行うシリーズの教材を配付し，全体の構成と授業の基本的考え方についての簡単なガイダンスを行う。質問，異議等があればこれに回答する。一冊の教科書を最初から訳読するという〈通常の〉読解授業とは異なる形式の授業をなぜ行うかについての〈インフォームド・コンセント（納得と同意）〉を行い，授業の主旨を学習者の間に周知徹底させる。このことは授業の主旨を学習者に内面化させ，授業に対する主体的姿勢を作り出すことによって，授業の実効性を高める上で欠くことのできない作業である。

[3] 日本社会が小子・高齢化しつつあることは〈常識〉として学生も知っていると思われる。しかし当該の問題についての背景的知識が必ずしも学習者にとって十分ではない場合には，これに関する日本語テキスト（簡単な一例として〈準備教材例1・2〉参照），あるいはテレビ番組の録画といった映像資料等も投入し，テキスト理解の基盤形成とクラス内での既有知識の共通化を図る必要があろう。場合によってはこの段階で，準備教材に基づき〈出生率=Geburtenrate〉，〈平均=Durchschnitt〉といった人口動態，統計に関する中核的分野固有語彙をいくつか導入し，これに続く読解作業を言語的側面から支援するという方法も考えられる。

[4] 導入編からテキストに付置した設問に順次答える形で，数人のグループで話し合いながらテキストを読ませ，その内容についてクラス全体で確認する。これに際して全文を訳読することは原則として行わない。しかし，理解が困難，あるいは精確な理解が必要等の箇所については部分的に学生に日本語化（Wiedergabe auf Japanisch）させる，ないしは教員が日本語化することも行う。しかしこれに際しては，テキストの内容理解を目標とする本授業モデルの

主旨から、そのまま翻訳出版できるような洗練されてこなれた日本語訳、あるいは「小綺麗で気の利いた訳語」（塩田 S. 18）を彫琢する必要はなく、理解した内容を日本語で言い換えることに主眼を置く¹⁷⁾。

[5] <教材例>では人口動態、統計等の分野に固有の語彙はその重複的出現を丸で囲んで明示した。しかし実際の授業にあたっては、学習者自身にこうした語彙の重なりに注意を向けさせるために、無印のテキストを配付し、既出の分野固有語彙を自らチェックする作業を行わせることも有効と考えられる。

[6] 人口動態、統計等の分野に固有の語彙を<分野別固有語彙一覧>にまとめるよう指導する。また各自が必要と判断する未知の一般的語彙についてもリストアップし、習得を進めるよう指導する。どのような形式の分野別固有語彙一覧を作成するかは何らかの具体例を提示した上で¹⁸⁾基本的に各学習者に任せる。

[7] 文学テキストは通常の場合、作品の言語的宇宙を味わい、鑑賞するといった点で読むことそれ自体が目的となる。これに対して教材例に挙げたような実用テキストは一般に、何らかの問題について調査を行い、論文や報告書を作成する、ゼミや会議で発表する、自分の生き方を考え、意思決定を行うといった何らかの行動の一環として読まれる。したがって語彙を習得し、テキストに付した設問に答えるという形で内容理解を進めるのは、実用テキストを使用して何かを行うためのあくまでも戦術的訓練ないしは準備作業にすぎず、その目的ではない。即ち外国語の教育と学習にあたっては、「こうした部分的領域をマスターすることはそれ自体としては無価値であり、コミュニケーション能力への統合を常に試みてはじめてこれが正当化されるのは当然のことである」

(Doyé S. 128) ことを決して忘れてはならない。しかし外国語教育においては、その戦術的技術性の教育が不可避であり、とりわけ比較的初歩的段階においてはこれが授業の中で大きな比重を占めざるをえないことから、読解教育の場合、学習者はテキストを読んで理解することそれ自体が読解の最終的目標であ

ると取り違える場合が多い。そこで設問に答え、テキストの内容理解を行うことが読解教育の中で自己目的化することを防止し、これを相対化させ、その位置価値 (Stellenwert) を理解させるためには読解をめぐる目的と方法についてのこのような事情を学習者に明らかにしなければならない。そのためには〈小子・高齢化編〉の支援テキスト3 (〈Geburtenrate extrem niedrig〉) の設問12), あるいは目標テキスト2の設問8) のような形で、テキストを一つの資料として他の目的のために使用し、たとえ日本語によってであれ、これを〈発信〉に転化させて行く機会を設けることが必要であると考えられる¹⁹⁾。

5. 評価と課題

5-1 利点

特定領域集中型読解法の利点としては次のような項目を挙げることができよう。

1) 背景的知識・内容スキーマの援用が容易

特定の領域・問題に関するテキストを連続して読むことにより、必然的に同一ないしは類似の背景的知識、内容スキーマが動員されることとなる。これによってテキスト内容の理解に際して概念知識の機能を十分に援用することができる。このことは未知の語彙の意味内容の推測に際して有力な手掛かりとして働き、内容面での助けによって言語知識にかかる負担を軽減することができる。世界知識について多くを期待できる大人を対象とする大学のドイツ語教育は、こうした点では有利な条件を備えていると言えよう。

2) 語彙的負担の軽減

本読解モデルでは、特定の領域・問題に固有の語彙が各テキストに反復して出現することによって言語的負担を言語知識の面で軽減することが可能となる。こうした分野固有語彙は反復を通じて定着し易く、言語知識を拡大強化する上で有利に作用する。また他方で語彙の共通性は内容上の共通性、類似性を

示唆するものであり、授業の中で獲得した内容的知識を既有的知識ベースとして新たなテキスト理解に使用する際の〈キュー (cue)〉としても機能すると考えられる。

3) 一般的語彙の獲得

上の1), 2) によって学習者は、コンテキスト等から未知の語彙、テキスト内容を推測しようとするに際して、多様な手掛かりが得られる。このことは必ずしも分野固有語彙とは言えない一般的語彙が未知の場合、その意味内容を推測し、これを自力で獲得する上でも有力な手掛かりとして機能する。こうした面においても特定領域集中型読解法は、言語知識の拡大強化に寄与するところが大であると考えられる。

具体的一例としては小子・高齢化編の支援テキスト1 (Anzahl der Kinder so gering wie nie) の向かって右側、上から五行目から六行目にかけての〈sich fortsetzt〉の場合を挙げることができよう。この記事のテーマはタイトルにもあるように、日本の人口に占める子供の割合がこの年にこれまでの最低水準を記録したというものである。こうした知識を大きな背景として、〈……しかし高度成長期に子供の数の減少が始まった。それは今日まで……〉というコンテキストの中で〈sich fortsetzt〉が出現すれば、これを〈続く〉と推測することはさほど難しいことではないと思われる。

4) 読解能力形成の自立的システムの形成

テキストを読み進む中で、言語知識を自ら獲得し、これを自己の読解戦力に繰入れ、言語知識を強化拡大しつつ、更に新たな概念知識を獲得して行く自力更生的システムを作り上げることができる。

概念知識 → ことば → (より多くの) 概念知識 → (より多くの) ことば
→ (更により多くの) 概念知識 → (更により多くの) ことば ……………→

5) 辞書依存度の引下げ

上に見たように、内容的側面と言語的側面の双方から豊富な手掛かりが与え

られることによってテキスト内容の推測が容易となり、辞書への依存度を引き下げることができる。このことはコンテキスト等を活用して事前に十分な推測を行うことによって、語意味が不明のままでも差し支えない語、推測が可能な語、どうしても辞書を引かなければならない語を判別し、辞書を引く語を絞り込むという作業の必要性と可能性を理解させる上で有効である。特にまだこうした作業に不慣れな始動的段階で、語意味を推測の方が辞書を引く以上に時間を要する場合が見られる。しかしこうして未知の語をすべて辞書で調べずとも、内容理解が可能なことを体験させることは、辞書なしには何もできないという読解観と〈学校で学習された無力感〉を克服する上で不可欠であり、建設的時間投資と考えるべきであろう。

6) 読解速度の向上と読解経験の拡大

辞書への依存度を引き下げることによって読解速度を向上させることができる。上に見たように読解能力の育成にとって読解量は決定的に重要な要因である。したがって読解速度の向上は一定時間内での読解量の拡大を通じて、読解能力の育成を能率的に促進すると考えられる。

7) マッシュー効果

以上の諸点の相互作用によって学習者の知識ベースが拡大し易く、類似のテキストを次々に読むことから、既存の知識ベースとの関連の中で未知の知識も獲得し易い。その結果として読解量が増大することによって語彙力と読解能力の間にマッシュー効果の発生が期待できる。

8) 高難度テキストの容易化

一年次の授業と二、三年次の授業の乖離の大きな理由の一つは、なるべく内容豊かなテキストを読ませたいとの教員の善き意図から、結果的に二、三年次の学習者には言語的に難度の高すぎるテキストを読ませがちとなることが挙げられる。もとより大学生は子供ではなく、ドイツ語の言語的知識・能力では未熟であるとしても、それ以外の分野においては基本的に独立した大人の知識、

能力を持ち合わせている。したがって二、三年次のドイツ語の言語知識〈相応〉のテキストを選択した場合、今度は逆に内容的な陳腐さから学習者との間に乖離を招くことはしばしば体験するとおりである。こうした背景の中で、いきなりそのまま読ませたのでは難度が高いと思われるテキストも、これを目標テキストとして設定し、その前に比較的容易な支援テキストを選定、配列し、これを読み進めることによってその難度を実質的に引き下げることができ、授業で無理なく使用可能となる。

9) 授業と試験の連続性

訳読式の読解教育の場合、授業で読んだテキストを試験で出題することとすると、試験準備は往々にして日本語訳の丸暗記となりがちである。その場合、試験は外国語の能力試験というよりも記憶能力の試験の様相を帯びることとなる。こうした問題点の反省に立って、授業で読んだ以外の全く別のテキストを出題することとすると、学習者は具体的な試験準備の行いようがなく、途方に暮れることとなる。これに対して特定領域集中型読解法で授業を行った場合、授業で読んだテキストと言語的、内容的に一定の共通性のある新たなテキストを出題することができ、授業の延長線上に試験を設定することが容易となる。一方学習者もまた、既読テキストについての内容と言語知識を復習することで通常の授業に対する準備を行うのと同様に試験準備を行うことができる。このことは復習による既習事項の定着を促進するのみならず、解答に際してはその発展的応用能力が必然的に求められることから、これをチェックすることも可能となり、評価基準の多様化という点でも有益と考えられる。

10) 達成感と効力感の醸成

辞書に全面的に依存するのではなく、推論等を駆使しつつ容易なテキストから始めて高難度の目標テキストに至るまで、縦深性のある一連のテキスト群を比較的短時間で読破し、少なくとも当該領域については〈エキスパート〉となることは、達成感と効力感に裏付けられた根拠ある自信を生み出す。このことは

更に学習動機と学習意欲の向上に肯定的に作用する。

11) 外国語の自己学習能力の形成

特定領域・問題に関するテキストは、テキストから自力で語彙を獲得しつつ、比較的容易に読み慣れることができ、速読することができるという体験は、空間的、時間的に大学の塀を超えた外国語の自立的学習と運用に転移が可能であると考えられる。このことは大学卒業後の人生における社会的素養としての外国語の自立的学習能力（＝潜在的直接交渉能力）の形成に寄与すると考えられる。

5-2 問題点と対策

当然のことながら特定領域集中型読解法には問題点もまた存在し、これについての対策が必要となる。

1) 同じような内容のテキストをいくつも連続して読むことによって学習者が退屈し、知的刺激に乏しい。

対策:各シリーズとテキストの選択にあたって、まず学習者の関心に配慮する。その上で一定の内容的、言語的共通性を維持しつつもテーマを少しずつずらして行くことによって内容に変化を与える。更に印刷されたドイツ語テキストに加えて、日本語や英語による資料、各種映像資料等も投入する。このことは単なる媒体の変化に留まらず、非言語的知識の活性化と拡大、そして多様な回路を通じての学習による記憶の安定した定着等の面からも有効であると考えられる。しかしこのことは 3) に見るような授業準備の時間と労力という面からはまた新たな問題となる可能性を含んでいる。

2) 各テキストが余りにも内容的、言語的に緊密に関連し合っていることによって〈真の読解能力〉が形成されない。

対策:授業の進展と共に、テキスト間の内容的、言語的相互関連性を低下させて行き、場合によってはテキスト間に飛躍も導入する。このことはまた 1)

に見た教材における変化という面からも重要であると考えられる。〈接続教材例2〉はこうしたテキストの一例である。このテキストのテーマは〈オートバイの事故数が減少した〉というものであり、統計関係の語彙が人口動態シリーズと重なる一方、その他の語彙と内容はこれとは大きく異なる。

3) 一定の内容的、言語的共通性を維持しつつ、易から難へと漸進するテキストの〈仕入れ〉と〈仕込み〉に多大の時間と労力を必要とする。とりわけ時事的なテキストを使用する場合は常に見直しと差し替えが必要となる。

対策:授業の準備に精励することは教員の責務として当然であるとしても、更に具体的には次のような対応策が考えられる。

a) 新聞、雑誌、書籍等の印刷媒体に加えて、インターネット等の電子媒体も活用してテキストの入手窓口の拡大に努める。良いテキストが入手できれば、教材化することは経験上比較的容易である。そのためにはなるべく多数のテキストに目を通し、収集することが必要となる。PCはそのための有効な戦術的機器となる。

b) 有効な教材は個人で私蔵するのではなく、他の教員と共同使用する。各教員の目標設定、授業環境等の違いから、他の教員の作成した教材がそのままでは使用しにくい場合には、入手したテキストのみを他の教員との共同使用に供することも考えられる。その場合でもテキストの検索に要する時間と労力を節減でき、より広範な領域からテキストを獲得することが可能となる。あるいはどのような分野のテキストを求めているかを他の教員に話しておき、これに関連するテキストを発見した場合には連絡するよう依頼しておく。更にテキストの検索をより組織的、効率的に行うには、ある教員はA新聞とB誌、別のある教員はC新聞とD誌といった形でテキストの検索を分担し、その成果を定期的に出し合うという方法も考えられる。

5-3 教授法上の技法の評価と課題

特定領域集中型読解法を一例とする教授法上の技法の評価は、その利点のみならず、問題点もまた勘案して行わなければならない。そしてその際に忘れてならないのが当該の技法それ自体に内在する利点と問題点もさることながら、3)に見たような、当該技法の〈使用〉という観点からの評価である。仮に小論で提示した読解教育モデルがそれ自体としては一定の有効性があるとしても、その準備に多大の時間と労力が必要とされる等の理由によって、結果的に授業の場で使用されないとすればその価値は無に等しい。即ち教材と授業の設計は、単にそれ自体についての〈カタログ性能〉の観点からではなく、使い勝手の良さ等に基づく現実の〈稼働率〉も含めた総体的な実用性と実効性という観点から常に検証し、改善を試みなければならない。したがって本読解教育モデルのみならず、教授法上の技法の改善について考えるにあたっては、「実践、認識、再実践、再認識というこの形態が循環往復して無限にくりかえされ、実践と認識の内容は一循環ごとに、より一段と高い段階にすすんでいく」(毛 S. 440) という形での理論的研究と授業実践の間の絶えざる往復運動をいかに行うかが大きな課題であるといえよう。

6. おわりに

大学における外国語教育の改革は、組織、制度と理念の変更という形で行われることが多い²⁰⁾。しかし外国語教育の改革は組織、制度と理念それ自体の変更を目的とするものではなく、学習者の能力向上を目標とした現実の実務の実践行為全体の変革である。そしてこれを直接的に担うのが日々の授業内容の改善である。したがって理念について言えば、外国語教育における理念は、単にこれを設定するだけの問題としてではなく、その具体的実現についてまでも責任を負うものとして考えるべきであろう。そして理念を単なる美辞麗句にとどめることなく、教育改革の統合的原理として機能させるためには、その実現を

追求する具体的努力がその前提となる²⁾。組織や制度をいじり、理念を書き換えれば日々の授業内容が自動的に改善されるという楽観的予定調和の世界が残念ながら存在しない以上、外国語担当教員は実際の授業に際して使用可能な教授法上の多様な戦術的手段を案出し、総体的な実用性と実効性の観点からこれを検証、改善し、優れた手段を蓄積、共有し、様々な場面の要求に対応可能な態勢の準備に努めなければならない。こうして教授法上の持ち駒を十分に用意し、常にこれを理念と突き合わせることによってはじめて、責任ある理念を自由で柔軟かつ堅実に設定する可能性が開かれると同時に、これを保証することが可能となるといえよう。

本稿は2000年度早稲田大学特定課題研究助成費（2000 A-117）による研究成果の一部である。

準備教材例 1

2001年(平成13年)6月21日 木曜日 41399号 (日刊)



〒104-8011 東京都中央区築地5丁目3番2号
発行所 朝日新聞東京本社
電話 03-3545-0131
©朝日新聞東京本社 2001

出生率1.35 4年ぶりに上昇

厚労省「団塊の孫」期待

2000年統計

一人の女性が一生のうちに平均何人の子どもを産むかを示す合計特殊出生率が2000年は、35と、過去最低だった前年(1.34)をわずかに上回った。4年ぶりに上昇したことが20日、厚生労働省の人口動態統計(概数)が明らかにした。厚労省は少子化傾向に歯止めがかかったのではないかと見ており、「団塊の孫」が活躍の場を拓いていくことが、今後の動向に注目されている。

合計特殊出生率がわずかに前年を上回ったのは98年(1.43)以来だ。20年の出生数は1990年の出生数(199万5000人)で、前年より1万5000人増えた。一方、89年1人多かった。9月の出生数が1637人で、99年より増えていることから、ミニムム出生の影響もあ

るかもしれない。インフルエザが流行したことが影響したから、2万人余減った。心臓病、死亡の多い高齢者増加

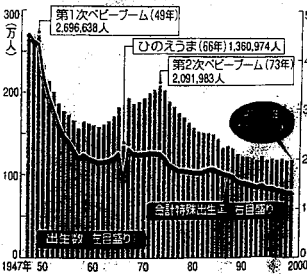
52万3319人となった。

数は約3万人以上増えた。だが、少子化に歯止めがかかっていたわけではない。厚労省がみるのは、女性の初婚年齢や第一子出生年齢が引き続き上昇しているためだ。平均初婚年齢は27.0歳、男性は28.8歳で、前年より0.1歳上昇し、女性

は0.1歳上昇した。年より約1万人減って計63万2189人となり、初めての子どもを産んだ時点での女性の平均年齢は、減少傾向が続いている。それに対し30代は、前年より約1万人増えて計

71,74年に生まれた団塊世代の子どもの30代後半、30代の出生が増えるの今後に注目している。厚労省は話している。

出生数と合計特殊出生率の推移



(朝日新聞 2001年6月21日)

準備教材例 2

第3種郵便物認可

年月 日 発行 冊数

人口1億2691万人、伸び率最低

国勢調査速報値

首都圏集中、傾向再び

都道府県の伸び率は、七割強を大きく上回る。一、二年の推計人口四千万八千四百九十九万人と増えの勢が、また強まってきた。大都市圏への人口増が自立的に五千万に近づき、人口は約二億に達する。人口は約二億に達する。人口は約二億に達する。

減少したのは秋田(一・一%)、福島の(一・一%)、青森(一・一%)、岩手(一・一%)、山梨(一・一%)、長野(一・一%)、新潟(一・一%)、富山(一・一%)、石川(一・一%)、福井(一・一%)、岐阜(一・一%)、愛知(一・一%)、三重(一・一%)、滋賀(一・一%)、京都(一・一%)、大阪(一・一%)、奈良(一・一%)、和歌山(一・一%)、徳島(一・一%)、香川(一・一%)、高松(一・一%)、愛媛(一・一%)、高知(一・一%)、福岡(一・一%)、佐賀(一・一%)、長門(一・一%)、大分(一・一%)、熊本(一・一%)、鹿児島(一・一%)、沖縄(一・一%)。

また、百年前の一九〇〇年(一・一%)の平均人口は、一億七千万に達していた。

片山虎之助総務庁長官は「千百年前の開港で、十月一日に実施した国勢調査の速報値を発表した。日本の総人口は、一億二千六百九十一万九千二百八十八人で、前回の一九九五年調査に比べ三十四万九千四百三十八人、率にして一・一%の増加となった。五年ごとの人口増加率をみると、二〇年が始まった国勢調査上で最も低い伸び率となった。東京を首都圏を中心とした人口増が顕著で、五割強に達している。火山噴出の穴もあき見せている。人口の伸び率は、国勢調査が始まって以来初めて、人口の自然増減がマイナスとなった。(一画参照)

2000年国勢調査の人口と世帯数(速報値)

| 道県 | 人口 | 増減数 | 増減率(%) | 世帯数 | 1世帯当たりの人口 |
|------|-------------|-----------|--------|------------|-----------|
| 北海道 | 5,682,950 | -9,371 | -0.2 | 2,305,565 | 2.46 |
| 青森県 | 1,475,635 | -6,028 | -0.4 | 606,488 | 2.91 |
| 岩手県 | 1,416,136 | -3,307 | -0.2 | 476,446 | 2.94 |
| 秋田県 | 1,365,204 | 36,495 | 2.6 | 583,237 | 2.36 |
| 山梨県 | 1,189,215 | -24,452 | -2.0 | 389,214 | 3.06 |
| 長野県 | 1,244,040 | -12,915 | -1.0 | 379,945 | 3.30 |
| 新潟県 | 2,126,998 | -6,594 | -0.3 | 687,584 | 3.09 |
| 富山県 | 2,985,424 | 29,894 | 1.0 | 895,443 | 3.33 |
| 石川県 | 2,004,787 | 20,397 | 1.0 | 667,022 | 3.01 |
| 福井県 | 2,024,820 | 21,280 | 1.0 | 659,852 | 3.08 |
| 岐阜県 | 6,838,004 | 178,693 | 2.6 | 2,172,097 | 2.73 |
| 愛知県 | 5,925,349 | 128,567 | 2.2 | 2,414,187 | 2.46 |
| 三重県 | 2,050,287 | 285,635 | 5.0 | 514,187 | 2.54 |
| 京都府 | 8,489,932 | 244,029 | 3.0 | 3,338,066 | 2.54 |
| 大阪府 | 2,475,724 | -12,640 | -0.5 | 795,597 | 3.11 |
| 兵庫県 | 1,120,843 | -2,282 | -0.2 | 357,536 | 3.15 |
| 奈良県 | 1,180,956 | 867 | 0.1 | 411,232 | 2.87 |
| 和歌山県 | 828,960 | 1,964 | 0.2 | 255,580 | 3.19 |
| 徳島県 | 888,170 | 6,174 | 0.7 | 309,289 | 2.88 |
| 香川県 | 2,214,409 | 20,425 | 0.9 | 757,102 | 2.92 |
| 高松市 | 2,107,687 | 7,372 | 0.4 | 680,160 | 3.10 |
| 愛媛県 | 3,787,427 | 29,738 | 0.8 | 1,280,310 | 2.94 |
| 高知県 | 1,443,235 | 174,899 | 2.5 | 2,546,723 | 2.77 |
| 福岡県 | 1,857,585 | 16,007 | 0.9 | 656,442 | 2.92 |
| 佐賀県 | 1,342,811 | 55,866 | 4.3 | 440,252 | 3.05 |
| 長門県 | 2,544,331 | 14,739 | 0.6 | 1,028,129 | 2.53 |
| 大分県 | 8,804,806 | 7,538 | 0.1 | 3,488,150 | 2.58 |
| 熊本県 | 5,550,742 | 148,865 | 2.8 | 2,038,918 | 2.72 |
| 鹿児島県 | 1,442,862 | 12,000 | 0.8 | 486,668 | 2.96 |
| 沖縄県 | 1,059,839 | -10,586 | -1.0 | 380,538 | 2.81 |
| 東京都 | 613,229 | -1,700 | -0.3 | 201,004 | 3.05 |
| 埼玉県 | 761,499 | -9,942 | -1.3 | 278,169 | 2.78 |
| 千葉県 | 1,950,656 | -94 | -0.0 | 681,292 | 2.82 |
| 茨城県 | 2,378,949 | -2,799 | -0.1 | 1,099,394 | 2.62 |
| 栃木県 | 1,523,107 | -27,436 | -1.8 | 583,646 | 2.62 |
| 群馬県 | 823,997 | -8,430 | -1.0 | 288,573 | 2.86 |
| 東京都 | 1,022,843 | -4,163 | -0.4 | 364,686 | 2.80 |
| 東京都 | 1,439,126 | -13,574 | -0.9 | 519,970 | 2.80 |
| 東京都 | 813,980 | -2,724 | -0.3 | 320,990 | 2.54 |
| 東京都 | 5,015,666 | 82,273 | 1.7 | 1,916,999 | 2.62 |
| 東京都 | 876,664 | -7,652 | -0.9 | 278,169 | 3.15 |
| 東京都 | 1,516,536 | -28,398 | -1.8 | 544,686 | 2.78 |
| 東京都 | 1,859,451 | -942 | -0.0 | 647,154 | 2.87 |
| 東京都 | 1,221,138 | -10,768 | -0.9 | 455,792 | 2.69 |
| 東京都 | 1,170,023 | -5,768 | -0.5 | 414,187 | 2.81 |
| 東京都 | 1,786,214 | -8,010 | -0.4 | 716,600 | 2.49 |
| 東京都 | 1,318,281 | 44,841 | 3.5 | 445,985 | 2.96 |
| 全 | 126,919,288 | 1,349,842 | 1.1 | 47,030,954 | 2.70 |

(朝日新聞・夕刊 2000年12月22日)

教材例

1. 人口動態シリーズ

1-1 導入編

① (支援T1)

Älteste Japanerin gestorben

Tase Matsunaga (geb. 1884), die bislang älteste Frau Japans, starb im Dezember letzten Jahres im glorreichen Alter von 114 Jahren in einem Altersheim in Tōkyō an Herzversagen.

Damit rückte Yasu Akino aus Sagara (Präf. Shizuoka) mit ebenfalls stolzen 113 Jahren auf Platz eins der Altersliste. (en)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

(JAPAN magazin 2/1999 をもとに原口が教材化)

註) JAPAN magazin の記事中の日本の人口動態に関する数値は、
 <日本の統計2000年版(総務庁統計局)>、<第五十回
 日本統計年鑑(総務庁統計局)>の数値とは必ずしも一致しない、

2/99

② (支援T2)

Wohnbevölkerung

In Japan lebten am 1.10.1993

- 1) 124.76 Mio. Menschen (63.53
- 2) Mio. Frauen, 61.23 Mio. Männer). Der Zuwachs lag gegenüber 1992 mit 0.25% so niedrig wie noch nie seit 1945. 16.90
- 3) Mio. Menschen (+660.000) waren älter als 65 Jahre: 20.84
- 4) Mio. jünger als 15 (-520.000). Auf 100 Jugendliche kamen
- 5) damit 81 (1983: 43) Alte. 12

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

1) 1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

(JAPAN magazin 4/1994 をもとに原口が教材化)

1-2 平均寿命編

① (支援T1)

Lebenserwartung steigt

Die durchschnittliche Lebenserwartung japanischer Männer (lag) 1995 bei 76,7 Jahre und stieg um 0,66 Jahre, die japanischer Frauen stieg auf 83,22 Jahre. Tendenz steigend.

(JAPAN magazin 5/98)

1) どういう数字?

2) どういう数字?

3) どういう数字?

(JAPAN magazin 5/98をもとに原口が教材化)

② (導入編と平均寿命編の目標T)

Lebenserwartung leicht gesunken

1) Mit 76,36 Jahren für Männer
2) und 82,84 Jahren für Frauen
liegt Japan in der durchschnittlichen (Lebenserwartung) auf der Welt immer noch an erster Stelle, auch wenn sich in diesem Jahr erstmals seit 1988 ein leichter Rückgang des Durchschnittes einstellte. Dies geht aus einer vom japanischen Ministerium

für Gesundheit und Soziales veröffentlichten Aufstellung hervor. Damit befindet man sich bei den Männern seit nunmehr zehn, bei den Frauen seit elf Jahren an der Spitze. Als Gründe für den leichten Rückgang gelten das Erdbeben letztes Jahr in Kōbe und verhältnismäßig viele Grippeopfer v. a. unter älteren Menschen. (gs)

1) どういう数字で、その位置付けは?

2) どういう数字で、その位置付けは?

3) 1996年に何が起きた?

4) 1988年はどういう年?

5) 3)の理由は?

6) どういう数字?

7) どういう数字?

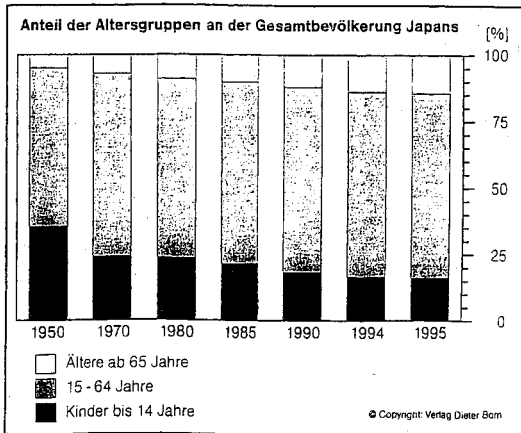
(JAPAN magazin 9/1996をもとに原口が教材化)

1 - 3 少子・高齢化編

① (支援T1)

Anzahl der Kinder (so gering wie nie),

- Wie das Amt des Ministerpräsidenten vor kurzem bekanntgab, ist die Zahl der Kinder bis 14 Jahre mittlerweile so stark abgesunken
- 2) daß ihr Anteil nur noch 16,1% an der Bevölkerung ausmacht. Nicht nur ist damit ihr Anteil auf einen historischen Tiefstand gesunken, ihre absolute Zahl liegt damit sogar noch unter der Zahl von 1920, als man mit ihrer Zählung begann und die Bevölkerung Japans weniger als die Hälfte der heutigen betrug.
 - 3) Bis in die sechziger Jahre machten Kinder einen Anteil von über 30% aus, doch in der Zeit des Hochwachstums setzte ein abnehmender Trend ein, der sich heute fortsetzt. Aller Voraussicht nach wird sich die Abnahme bis zum Jahre 2000 fortsetzen, bis eine Stabilisierung der Kinderzahl einsetzt. Gegenwärtig leben in Japan 125,5 Millionen Japaner, wovon 20,2 Millionen Kinder unter 15 Jahren sind.
 - 4)
 - 5)
 - 6)
 - 7)
 - 8)



- 1) <Kinder>とはどういう人？
 - 2) どういう数字で、その位置付けは？
 - 3) この年はどういう年で、日本の人口は？
 - 4) どういう数字？
 - 5) いつから？
 - 6) どういう年？
 - 7) どういう数字？
 - 8) どういう数字？
- (JAPAN magazin 6/1995 をもとに原口が教材化)

② (支援T2)

Kinderzahl so niedrig wie nie

Zum ersten Mal seit man in Japan 1920 mit der Volkszählung begann, hat die Zahl der Kinder (Personen unter 15 Jahren) die Zahl von 20 Mio. unterschritten. Das berichtete das Japanische Amt für Statistik in seiner neuesten Untersuchung. Hatte ihr (Anteil) an der Gesamtbevölkerung bei Kriegsende 2) noch bei 36,8% gelegen, ist er 3) mittlerweile auf 15,8% gesunken, wobei gegenüber dem Vorjahr ein erneuter Rückgang von 4) 0,3% zu verzeichnen war.

Unter größeren Volkswirtschaft-

ten weist lediglich Italien mit 15,1% einen niedrigeren Wert 5) auf. Gleichzeitig ist die Zahl der älteren Menschen kontinuierlich gestiegen. Zum Kriegsende machten die über 65jährigen lediglich 5% der Bevölkerung aus. 6) Derzeit haben sie einen Anteil von 14,9% und dürften binnen 7) kurze Zeit die Zahl der Kinder übertreffen. Den geringsten Anteil von Kindern trifft man im Raum Tokyo mit 13,5%, den 8) höchsten in Okinawa mit 21,9% 9) an.

1) 何が起きた?

2) どういう数字?

3) どういう数字?

4) どういう数字?

5) どういう数字?

6) どういう数字?

7) どういう数字?

8) どういう数字?

9) どういう数字?

(JAPAN magazin 2/1996 をもとに原口が教材化)

③ (支援 T 3)

Geburtenrate extrem niedrig

- Die japanische Geburtenrate ist so niedrig wie noch die seit dem Beginn der Aufzeichnung demographischer Daten im Jahre 1899. Im vergangenen Jahr wurden im Reich der aufgehenden Sonne genau 1.187.087 Geburten gezählt. Dies gab das japanische Sozialministerium Anfang dieses Monats in Tokyo bekannt. Dabei ist vor allem auffallend, daß japanische Frauen immer später heiraten und immer später gebären. Seit dem zweiten Baby-Boom Anfang der 70er Jahre hatte die Zahl der Geburten 21 Jahre in Folge abgenommen, bis sie 1994 erstmalig wieder einen Anstieg zu verzeichnen hatte. Doch dieser Trend kehrte sich 1995 wieder um. Der Rückgang um fast 50.000 Geburten ging dabei fast völlig auf die verringerte Geburtenzahl unter Frauen zwischen 20 und 30 Jahren zurück. Das durchschnittliche Alter bei der ersten Geburt lag 1965 noch bei 25,7 Jahren, ist mittlerweile aber auf 27,5 Jahre angestiegen. Dagegen betragen die Zahl der Geburten pro Frau im Landesschnitt nur noch 1,43. Um den gegenwärtigen Bevölkerungsstand zu halten, wäre eine Geburtenrate von mindestens 2,1 erforderlich, so die Untersuchung des Ministeriums.
- 1) 何が起きた？
2) どういう年？
3) どういう数字？
4) どういうこと？
5) この年に何が起きた？
6) この年に何が起きた？
7) どういうことで、その要因は？
8) どういう数字？
9) どういう数字？
10) どういう数字？
11) どういう数字？
12) あなたは<eine Geburtenrate von mindestens 2,1>を守ることは必要と考える？/不要と考える？なぜ？(あなたの意見は？)
- (JAPAN magazin 7/1996 をもとに原口が教材化)

④ (支援T 4)

Seniorenzahl übersteigt
Kinderzahl

Die Zahl der Menschen über 64 hat in Japan die Zahl der Kinder unter 15 Jahren das erste Mal überschritten. Am 1. Juni 1997 lebten in Japan

- 1) 19.54 Mio. Senioren (1996:
2) 18.81 Mio.). Das sind ca.
3) 50.000 mehr als die 19.49 Mio. gezählten Kinder. (tt)

- 1) どういう数字?
2) どういう数字?
3) どういう数字?
4) どういう数字?

(JAPAN magazin 8/1997 をもとに原口が教材化)

⑤ (少子・高齢化編の目標T)

Überalterung
schreitet voran

- In Japan sind 20,49 Mio. Menschen 65 Jahre und älter, das sind 16,2% der Bevölkerung. Die 20-Millionen-Marke wurde dieses Jahr durchbrochen, im letzten Jahr waren es noch 760.000 Menschen weniger. Vor 7 Jahren lag die Zahl bei 15 Mio. Und vor 19 Jahren bei 10 Mio. Innerhalb der letzten 19 Jahre hat sich der Zahl der älteren Menschen somit verdoppelt. 8,51 Mio. darunter sind Männer (13,7%) und 11,98 Mio. Frauen (18,6%). Zur Zeit kommt auf zwei ältere Männer ein junger Mann, im Jahr 2015 werden es vier alte Bürger auf einen jungen Bürger sein. Das nationale Institut für Bevölkerung und Soziale Sicherheitsforschung prognostiziert für das Jahr 2021 einen Anstieg auf 33,37 Mio. ältere Menschen, da die ersten Kinder der Babyboomphase ihren 70. Geburtstag feiern. Das Gleichgewicht zwischen Alt und Jung weicht immer mehr auseinander. Der Anteil der Hundertjährigen beträgt 10.158 und übersteigt den Vorjahreswert mit 1.667 Personen. 1963 waren es nur 153 Hundertjährige. (m)

- 1) どういう数字?
2) どういう数字?
3) どういう数字?
4) どういう数字?
5) どういう数字?
6) どういう数字?
7) どういう数字?
8) どういうこと?
9) どういう数字?
10) どういう数字?
11) どういう数字?
12) どういう数字?

(JAPAN magazin 11/1998 をもとに原口が教材化)

1 - 4 離婚編

① (支援T1)

Scheidung ist o.k.

- 1) 54,2% aller Erwachsenen halten eine Scheidung für o.k. 1) どういう数字?
- Noch 1978 waren es bloß 20%, 2) 2) どういう数字?
- 1992 immerhin schon 44,4%. 3) 3) どういう数字?
- Auch mit dem Nachwuchs hat man es nicht mehr so eilig: von 4) 4) どういう数字?
- 4) 30,6% auf 42,6% stiege in den letzten fünf Jahren die Zahl 5) 5) どういう数字?
- derer, die auch ohne Kinder auskommen könnten.

(JAPAN magazin 3/1998 をもとに原口が教材化)

② (支援T2)

Rekord-Scheidungsrate

- Im Jahr 1998 haben sich 1) 1) どういう数字で、その位置付けは?
- 1) 243.000 Ehepaare scheiden lassen, 20.000 mehr als noch 2) 2) どういう数字?
- im Jahr zuvor. Damit wurde laut Gesundheitsministerium eine Rekordzahl erreicht. (en)

(JAPAN magazin 2/1999 をもとに原口が教材化)

③ (離婚編の目標 T)

Rekord

Jede hundertste Ehe
wird geschieden

WIESBADEN, 3. August (rtr). Im vergangenen Jahr sind in Deutschland so viele Ehen geschieden worden wie nie zuvor. Das Statistische Bundesamt in Wiesbaden teilte am Dienstag mit, die Zahl der Scheidungen habe im Vergleich zu 1997

- 1) um 2,5 Prozent auf 192 438 zugenommen. 2)
 Von 100 Ehen wurde demnach eine ge- 3)
schieden. Weniger Scheidungen habe es in
 Berlin, Bremen, Hamburg, Hessen und
 dem Saarland gegeben. Hingegen sei die 4)
Rate in den ostdeutschen Bundesländern 5)
 deutlich gestiegen. In Sachsen-Anhalt
 nahm die Zahl der Scheidungen um 17,4 7)
 Prozent zu, in Sachsen und Thüringen je-
 weils um 10,2 Prozent. 8)

Die Behörde führt die unterschiedliche Entwicklung darauf zurück, dass sich auch bei Scheidungen der Osten immer mehr den Verhältnissen im Westen angleicht und Antragstaus beseitigt werden. Die Zahl der minderjährigen Kinder, die zu sogenannten Scheidungswaisen wurden, ging um 2,3 Prozent auf 159 298 Kinder zurück.

- 9) ging um 2,3 Prozent auf 159 298 Kin- 10)
 der zurück.

(Frankfurter Rundschau 04.08.1999をもとに原口が教材化)

1) どういう数字?

6) 5) の内容の原因は?

2) どういう数字?

7) どういう数字?

3) どういう数字?

8) どういう数字?

4) どういう場所?





9) どういう数字?

5) どういう場所?

10) どういう数字?

人口動態シリーズの目標 T-1

Statistisches Bundesamt Deutschland

|  Bevölkerung | |
|--|--|
| <p>2)</p> <p>zum Thema:</p> <p>3)</p> <p>4)</p> | <p>Home Zur <u>Bevölkerung</u> Deutschlands <u>zählen</u> alle Einwohner, die mit ihrer Hauptwohnung in der Bundesrepublik Deutschland gemeldet sind, also auch alle hier gemeldeteten Ausländer und Ausländerinnen.</p> <p>Zahlen & Fakten Die Bundesrepublik Deutschland ist ein dichtbesiedeltes Land. Hier leben rd. 82 Mill. Einwohner, das entspricht einer <u>Bevölkerungsdichte</u> von 230 Personen je Quadratkilometer. Die <u>Vergleichszahl</u> für die Europäische Union <u>liegt</u> bei 116.</p> <p>Wissenschaftsforum</p> <p>Produkte & Service</p> <p>Statistik-Shop</p> <p>Links</p> <p>Tabellenübersicht Die <u>Bevölkerungsentwicklung</u> wird von <u>unterschiedlichen</u> Einflüssen geprägt. <u>Geburten</u> und <u>Sterbefälle</u> bestimmen die Einwohner<u>zahl</u> ebenso wie die Wanderungsbewegungen, die über die Grenzen der Bundesrepublik Deutschland hinweg stattfinden.</p> <p>Grafikübersicht Am <u>Altersaufbau</u> der <u>Bevölkerung</u> läßt sich ablesen, wie sich das Verhältnis der jüngeren zur älteren Generation <u>entwickelt</u>. Bereits heute ist die Bundesrepublik Deutschland - wie die meisten Industrieländer - durch eine <u>verhältnismäßig</u> schwach vertretene junge Generation gekennzeichnet. Die <u>Lebenserwartung</u> wächst, und dadurch verschiebt sich die <u>Altersstruktur</u> ständig zugunsten der älteren Menschen. Bereits heute <u>leben</u> in Deutschland mehr 65 jährige oder ältere Menschen als 15 jährige und jüngere.</p> <p>Bevölkerungs-entwicklung</p> <p>Sachgebieteübersicht Die <u>Entwicklung</u> der <u>Geburten</u>, aber auch der <u>Eheschließungen</u> und <u>scheidungen</u> spiegelt die Einstellung der Gesellschaft zur Familie und zu Kindern wider. <u>Niedrige</u> <u>Geburtenzahlen</u> und <u>abnehmende</u> <u>Heirats</u>bereitschaft haben auch <u>Einfluß</u> auf die Haushaltsgröße, die in der Bundesrepublik Deutschland <u>tendenziell</u> seit Jahren <u>abnimmt</u>. Haushalte mit mehr als fünf Personen sind nur noch äußerst selten vorzufinden, während die <u>Zahl</u> der Einpersonenhaushalte ständig wächst. Besonders in Großstädten sind Einpersonenhaushalte <u>überdurchschnittlich</u> häufig anzutreffen.</p> <p>Copyright</p> <p>Ausprechpartner:</p> <p>Bevölkerung: Bevölkerungsfortschreibung, Ausländer-, Einbürgerungs-, Wanderungsstatistik und Gebietsstand oder Tel.: +611 - 75 - 2026</p> <p>E-mail: </p> <p>Geburten, Sterbefälle, Eheschließungen und -scheidungen, Bevölkerungsvorausberechnungen oder Tel.: +611 - 75 - 2861</p> <p>E-mail: </p> <p>Haushalte und Familien oder Tel.: +1888 - 643 - 8720</p> <p>E-mail: </p> |

Bevölkerung

- 1) ドイツの **Bevölkerung** とはどのような人?
- 2) どのような数字?
- 3) どのような数字?
- 4) どのような数字?
- 5) ドイツの老人と子供の数の関係は?
- 6) ドイツでは世帯構成員の数はどのような傾向にある?
- 7) 6) の原因は?

Statistisches Bundesamt Deutschland のHPをもとに原口が教材化

人口動態シリーズの目標 T-2

Statistisches Bundesamt Deutschland

**Bevölkerungsentwicklung
Deutschlands bis zum Jahr 2050**- Ergebnisse der 9. koordinierten
Bevölkerungsvorausberechnung -

Nach der 9. koordinierten
Bevölkerungsvorausberechnung nimmt die Bevölkerung
Deutschlands in den nächsten 50 Jahren um mindestens 12

1) Millionen ab

Heute hat Deutschland etwa 82 Millionen Einwohner. In 50 2)
Jahren werden es – je nach den Annahmen zur Zuwanderung
– nur noch 65 bis 70 Millionen sein. Zu dieser Abnahme
3) kommt es, weil in Deutschland – wie in den letzten drei
Jahrzehnten – auch in den nächsten 5 Jahrzehnten mehr
Menschen sterben als Kinder geboren werden.

Zugleich wird sich das zahlenmäßige Verhältnis zwischen
älteren und jüngeren Menschen erheblich verschieben. Bis
zum Jahr 2050 werden die Menschen im Alter von 58 bis 63
5) Jahren zu den am stärksten besetzten Jahrgängen gehören.
Heute sind es die 35- bis 40-jährigen. 6)

Bei einer nahezu gleichen Bevölkerungszahl von 69
Millionen im Jahr 1950 und 70 Millionen im Jahr 2050 wird
sich der Altersaufbau innerhalb dieses Jahrhunderts
umkehren: Waren 1950 etwa doppelt so viele Menschen
unter 20 Jahre wie über 59 Jahre alt, so wird es 2050 mehr als
doppelt so viele ältere als junge Menschen geben. Grafisch
wird diese Veränderung an der "Alterspyramide" (die heute
schon kaum mehr Pyramidenform aufweist) besonders
deutlich.

Ausgewählte Tabellen, Grafiken und ein ausführlicher
Kommentar stehen Ihnen hier als Download zur Verfügung.
Zum Lesen der Datei benötigen Sie das Programm Acrobat
Reader, das kostenlos ebenfalls als Download über
<http://www.adobe.de> bezogen werden kann

(PDF- Datei, 394 KB) **Download**

Weitere Ergebnisse der Bevölkerungsvorausberechnung
können im Statistik-Shop unter der Rubrik
"Online-Produkte" zum Preis von DM 8,00 abgerufen
werden.
Die ausführlichen Ergebnisse werden auf einer CD-ROM
veröffentlicht.

Statistik-Shop
Statistik-Shop
Online-Produkte
Gebiet, Bevölkerung,.....

Home Copyright Zurück

Bevölkerungsentwicklung Deutschlands bis zum Jahr 2050

1) どういう数字?

2) どういう数字?

3) どういう数字?

4) その原因は?

5) どういう年齢層?

6) どういう年齢層?

7) 1950年と2050年を比較すると?

8) あなたはセミで、日本とドイツの人口動態の報告を担当することになりました..

これまでに読んだ日本とドイツの人口動態についてのテキストをもとに、両者を比較対照した報告書を作りなさい。

(ことばで説明するだけではなく、表やグラフ等も活用するなど聞き手/読み手にとって分かりやすいプレゼンテーションの方法にも気を配ること。

なおウラをとったり、必要なデータを補ったりするためには他の各種統計資料等も参照すること)

Statistisches Bundesamt Deutschland のHPをもちに原口が教材化

接続教材例 1

»Internationalisierung« Japans:

Ausländer und Mischehen

Von Sophie F. Esters

2)

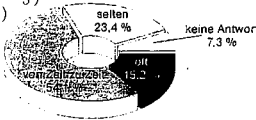
1991 lebten mehr als 663.000 Japaner im Ausland, der überwiegende Teil, 257.000 Japaner, in den USA, gefolgt von Brasilien und Großbritannien. Die Zahl der in Japan lebenden Ausländer betrug 1991 1.218.000. Die Koreaner sind mit 693.000 Personen die größte ausländische Gruppe in Japan; gefolgt von den Chinesen und den Brasilianern. 90 Prozent aller Koreaner sind in Japan geboren und dort aufgewachsen. Oft sprechen sie nur wenig oder gar kein Koreanisch mehr. Eine Doppelstaatsangehörigkeit gibt es in Japan jedoch nicht und ist auch nicht in der aktuellen Diskussion.

Im Januar 1993 wurde das Ausländergesetz insofern geändert, als daß Ausländer über 16 Jahre, die länger als ein Jahr in Japan leben, nicht mehr ihre Fingerabdrücke abgeben müssen, sondern lediglich mit Lichtbild und Unterschrift registriert werden. Die Fingerabdrücke stießen nicht nur bei den Koreanern jahrzehntelang auf heftigen Widerstand.

Die folgenden Tabellen verdeutlichen die genannten Zahlen; ferner informieren sie über Mischehen zwischen Japanern und Ausländern.

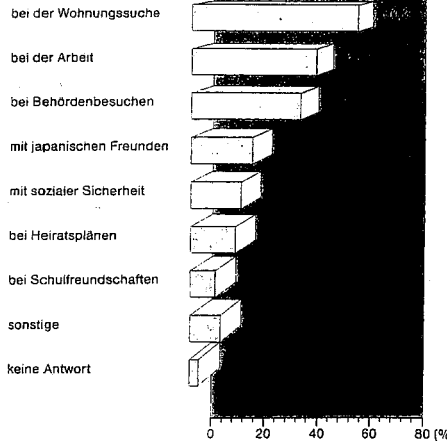
| Japaner im Ausland | | | Ausländer in Japan | | |
|--------------------|---------|-------|--------------------|-----------|-------|
| Land | Anzahl | [%] | Nationalität | Anzahl | [%] |
| 1. USA | 257.845 | 38,9 | 1. Korea | 693.050 | 56,9 |
| 2. Brasilien | 101.174 | 15,3 | 2. China | 171.071 | 14,0 |
| 3. U.K. | 48.200 | 7,3 | 3. Brasilien | 119.333 | 9,8 |
| 4. Kanada | 23.372 | 3,5 | 4. Philippinen | 61.837 | 5,1 |
| 5. Deutschland | 22.314 | 3,4 | 5. USA | 42.498 | 3,5 |
| 6. Australien | 17.876 | 2,7 | 6. Peru | 26.281 | 2,2 |
| 7. Thailand | 17.075 | 2,6 | 7. U.K. | 11.794 | 1,0 |
| 8. Frankreich | 16.164 | 2,4 | 8. Thailand | 8.912 | 0,7 |
| 9. Singapur | 15.726 | 2,4 | 9. Vietnam | 6.410 | 0,5 |
| 10. Hong Kong | 14.465 | 2,2 | 10. Kanada | 5.903 | 0,5 |
| Gesamt | 663.074 | 100,0 | Gesamt | 1.218.891 | 100,0 |

3)




4)

Wann und wo in Japan wohnende Ausländer Vorurteile oder Diskriminierung im Kontakt mit Japanern erfahren haben (unten) sowie Häufigkeit solcher Erfahrungen (links)



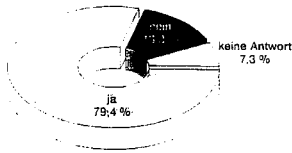
Herzogstr. 7 · D-60002 München · Telefon 089 / 44 94 54 · Fax 089 / 35 56 85



JAPANALIA
JAPANESE LIVING DESIGN

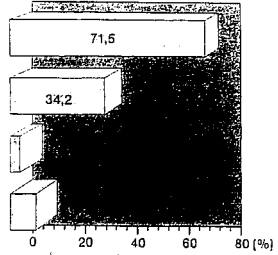
TATAMI
FUTON
MOBEL
TANZU
SHOJI
AKARI LAMPEN
LACK
KERAMIK
STOFFE
YUKATA
ACETE KIMONOS

13) **Ob in Japan wohnende Ausländer näheren Kontakt zu Japanern wünschen (rechts) sowie die Frage, ob überhaupt Kontakte zu Japanern existieren (unten)**



14)

Wünsche mir engere Kontakte
 Wüsche Kontakte auch nach dem Japanaufenthalt
 Wüsche keine Kontakte
 Keine Antwort



15)

| Mischehen von Japanern mit Ausländern | | | | | | | | | | | |
|---|-----------|-------|-------|-----|--------|--|-------|-------|------|--------|-------|
| Ausländische Ehepartnerinnen von Japanern | | | | | | Ausländische Ehepartner von Japanerinnen | | | | | |
| | Insgesamt | Korea | China | USA | Andere | Insgesamt | Korea | China | USA | Andere | |
| 1970 | 2.108 | 1.536 | 280 | 75 | 217 | 1970 | 3.438 | 1.386 | 195 | 1.571 | 286 |
| 1980 | 4.386 | 2.468 | 912 | 178 | 838 | 1980 | 2.875 | 1.651 | 194 | 625 | 405 |
| 1990 | 20.026 | 8.940 | 3.614 | 260 | 7.212 | 1990 | 5.600 | 2.721 | 708 | 1.091 | 1.080 |
| 1991 | 19.096 | 6.969 | 3.871 | 243 | 8.013 | 1991 | 6.063 | 2.666 | 789 | 1.292 | 1.316 |
| 1970 | 100,0 | 72,9 | 13,3 | 3,6 | 10,3 | 1970 | 100,0 | 40,3 | 5,7 | 45,7 | 8,3 |
| 1980 | 100,0 | 56,0 | 20,8 | 4,1 | 19,1 | 1980 | 100,0 | 57,4 | 6,7 | 21,7 | 14,1 |
| 1990 | 100,0 | 44,6 | 18,0 | 1,3 | 36,0 | 1990 | 100,0 | 48,6 | 12,6 | 19,5 | 19,3 |
| 1991 | 100,0 | 36,5 | 20,3 | 1,3 | 42,0 | 1991 | 100,0 | 44,0 | 13,0 | 21,3 | 21,7 |

oben: absolute Zahlen ; unten: Prozent

20) **Aktuelle Arbeitssituation für ausländische Arbeitnehmer in Japan**

Ein wachsendes Problem der japanischen Gesellschaft stellt in den letzten Jahren die große Zahl der illegalen Einwanderer dar, die ohne Arbeitserlaubnis einer Beschäftigung nachgehen. Aus Studienzwecken ist es zwar möglich, eine befristete Arbeitserlaubnis zu bekommen, aber als ungelernter Arbeiter ist dies so gut wie unmöglich. So reisen viele mit einem Touristenvisum ein und arbeiten meistens unter sehr schlechten Bedingungen. Diese Arbeitsplätze bezeichnet man als »JK«-Arbeitsplätze, nach den japanischen Wörtern »jikena« (gefährlich), »kitanaie« (dreckig) und »kitsuis« (schwer). Sie haben keinen offiziellen Arbeitnehmerschutz und sind so auf die Willkür ihrer Arbeitgeber angewiesen. Ferner riskieren diese Arbeitswilligen, durch die von der Mafia illegalen Arbeitsvermittlungsgesellschaften ins Drogenmilieu abzurutschen. Aber auch legal arbeitende Ausländer haben oft massive Probleme von Diskriminierung am Arbeitsplatz, Einseitige Kündigungsfristen, das Nicht-Zahlen noch billiger Gehälter nach einer Kündigung oder von Überstunden sind die häufigsten von Ausländern angeführten Beschwerden.

16)

Organisationen, die sich auf kostenlose Hilfe und Beratung von Ausländern spezialisiert haben:

- NUGW: 06-947-4733, Mr. Koyama
- Labour Standards Bureau: Inspection Section, Tel. (06) 942-5231
- Labour Standards Office: Tel. (08) 94-0451, Mr. Imahara
- Hyogo Prefectural Labour Standards Office (2nd Bldg., District Offices in Kobe, 4F, 1-1, Hatoba-chō, Chuō-ku, Kōbe): Advisor for Foreign Workers, Tel. (078) 332-7020 (advance notification for consultation in English required)
 - on problems relating to working conditions, i.e. conditions of employment not clearly stated in a contract, non-payment of wages, termination, dangerous job place environment, etc.
- Hyogo Citizens Information Center (Sōgo Dept. Store Annex, 2F, 8-1-26, Miyuki-dori, Chuō-ku, Kōbe): Labour Advisor, Tel. (078) 252-1001 (Japanese only) - advice & information regarding cases of termination, joining a labour union, average wage rates, injury on the job, etc.
- Education Workers Un.: Tel. (06) 362-2472, Kyōko Rōdō
- Union Higoro (Rights of Immigrants: Network in Kansai): Tel. (06) 942-0219
- Asian Friends: (06) 634-2127

(JAPAN magazin 7/95をもとに原口が教材化)

Ausländer und Mischehen

- 1) 何についての記事?
- 2) この表は何を表す?
- 3) このグラフは何を表す?
- 4) このグラフは何を表す?
- 5) どういう数字?
- 6) どういう数字?
- 7) どういう意味?
- 8) どういう数字で全体の中での位置付けは?
- 9) どういう数字で彼らの言語は?
- 10) 日本ではどうなっている?
- 11) この年に何があった?
- 12) これに代わってどうなった?

1 3) このグラフは何を表す？

1 4) このグラフは何を表す？

1 5) この表は何を表す？

1 6) これは何？

2.2% weniger Ausländer abgeschoben

- Japan hat letztes Jahr 54.271 Ausländer abgeschoben. Das sind 2.2% weniger als im Vorjahr. Der Rückgang wird auf Maßnahmen gegen illegale Einwanderer und den einbrechenden Arbeitsmarkt aufgrund der schlechten Wirtschaftslage zurückgeführt. (17)
- 18) 1 7) どういう数字？
- 1 8) どういう数字？
- 1 9) タイトルの事態になった原因は？

(JAPAN magazin 7/97 をもとに原口が教材化)

2 0) タイトルはどういうこと？

2 1) 具体的に言うと何？

2 2) これに関してテキストではどういう問題点が列挙されている？

接続教材例 2

Verkehr

Zahl der Motorradunfälle ist zurückgegangen

WIESBADEN, 3. August (afp/dpa). Die Zahl der Motorradunfälle in Deutschland ist im vergangenen Jahr zurückgegangen.

- 1) 1998 seien 39.575 und damit 6,2 Prozent 2)
weniger Motorradfahrer und Beifahrer
verunglückt als ein Jahr zuvor, teilte das
Statistische Bundesamt am Dienstag in
Wiesbaden mit. Bei den Unfällen wurden
- 3) 864 Menschen getötet und 12.726 schwer 4)
verletzt.

Als Grund für den Rückgang der Unfälle vermuteten die Statistiker die schlechtere Witterung. Daher seien die Motorräder häufiger in der Garage geblieben.

Motorradfahrer bleiben gleichwohl die „am stärksten gefährdeten Kraftfahrzeugbenutzer“. Bezogen auf 1000 registrierte Motorräder verunglückten 1998 laut Bundesamt durchschnittlich 14 Fahrer und 6)
Beifahrer, bei Auto-Insassen lag das Unfallrisiko mit acht Verunglückten je 1000 7)
Wagen erheblich niedriger. Die Gewerkschaft der Polizei forderte die Motorrad-Hersteller auf, die „heißen Öfen“ wieder freiwillig auf 98 PS (72 kW) zu drosseln. 8)

(Frankfurter Rundschau 1999 08.04.をもとに原口が教材化)

- 1) どういう数字?
- 2) どういう数字?
- 3) どういう数字?
- 4) どういう数字?
- 5) 1) - 4) の原因は?
- 6) どういう数字?
- 7) どういう数字?
- 8) どういう数字?

註

- (1) ウィルキンズは〈文法を中心とするシラバス〉を「学習者を漸進的に目標言語の表現形式に触れさせていくことによって言語を教えようとする」授業の組み立て方であるとしている(ウィルキンズ S. 22)。これに対して〈概念を中心とするシラバス〉については、「概念を中心とするシラバスを作成する場合には、……話し手が言語を通して伝達しようとしているのは何かを問うのである。そうすれば、語学教育を言語形式からではなく、内容に基づいて構成することができる」としている(ウィルキンズ S. 23)。
- (2) 〈生テキスト〉とはドイツ語教育のために書かれたのではなく、原則として実際のコミュニケーションの用に供されることを前提として書かれたテキストを指すものとする。
- (3) ドイツ語の使用の実際に即した授業という観点からは一年次から概念を中心とするシラバスで授業を行うことが望ましい。しかし ABC から接続法までの文法項目を概念を中心としたシラバスで網羅し、定着させるためにはかなりの授業時間数を必要とし、かつまた日本の大学生を対象とする既成の教材は少ない。また一年次の授業を各教員が個々に概念を中心とするシラバスで構成した場合、担当者による特定の文法項目の既習／未習のばらつき等が問題となろう。これに対しては、当該箇所での二、三年次の授業も視野に収めたドイツ語教員全体の意志統一と授業内容の調整といった準備作業が必要であり、その実施は現実的には必ずしも容易ではない。そこで小論では、一年次に通常の文法を中心としたシラバスで90分の授業を50回程度履修した二年次生、あるいは更に二年次に90分の授業を25回から50回程度履修した三年次生のクラスを教員が新たに担当した場合に、読解能力の育成を目標としてどのような授業の組み立てが可能かという「差し当たりの彌縫策」の案出を目標として論を進める。二年次生か三年次生かの違いは、到達目標のレベルを引き下げる／引き上げる／引き上げる、導入的な容易なテキストを追加する／省略する、授業進度を引き下げる／引き上げる等の措置によって担当教員が適宜調整を加えるものとする。
- (4) 大学における教育改革に際して、組織あるいはカリキュラムという〈入れ物〉についての変更は、具体的な授業の〈中身〉の変更と比較して、文部科学省等の教育行政機関、マスコミ、他大学、他学部といった外部者には何らかの改革実施のサインとしてアピールし易い。しかし改革に際して最も意識しなければならないのは外部者の目ではなく、教員と共に授業の共同構成者である学生目である。即ち改革が学生に対して何よりもインパクトを与えるのは日々の授業内容が質的に大きく改善されることである。
- しかし学生には各個人としての様々な思惑や利害があり、大学や授業に対する意識と行動のありようは一律ではなく、また決してきれいな事だけで捉えることはできない。現実に対応した実効性ある教育改革のためには更にこのレベルにまで踏み込んだ議論と具体的な施策が必要であると考えられるが、小論ではこの問題には立ち入らない。小論では学生を〈理想的学習者〉と想定して論を進めることとする。
- 大学教育と学生の関係をめぐって更に根本的には、「箱(学校)を通過したものの変化の原因は箱の中にあるはず、という常識的思考」(竹内 1994 S. 65)、「学生や生徒の人間形成は学校内部にあるはず、という教育関係者の願望思考(教育者支配＝ペダゴグラーシ-!)」(竹内 1995 S. 66)あるいは「教育を変化させれば社会がかわるという教育帝国主義」(竹内 1995 S. 69)といった問題が係わってくるが、小論ではこの問題にも立ち入らない。
- (5) 〈世界知識〉とは「概念的に整合性のある意味を構成するときに使用される、或る現象や事態に関する一まとまりの知識」、「日常世界の諸事象に関する知識」であり、「概念知識」とも称されるものである(杉谷 S. 9)。これに対して〈言語知識〉とは「発音、統語、語義等」(杉谷 S. 9)の狭義の〈ことば〉についての知識を指すものとする。
- (6) 〈基根語〉とは意味内容を推測される語を意味し、〈前提語〉とは基根語の意味内容を推測する手助けになる語を意味する(Röhr S. 12)。

- (7) Krashen のこのことばは、1987年のミラノの British Council で行われた会議での発言とされている。
- (8) 現実に一年間で600語程度しか導入できないとすれば、そこで考えられる一つの選択肢は、二、三年次でも継続して語彙の導入を行い、二、三年間で1000-2000語を習得させることである。しかし小論は、上にも述べたように、こうした戦略的選択は行わず、〈通常の〉一年次の授業を受けてきた二、三年次の学習者を対象として、〈大学生にふさわしい内容のあるテキストを読む〉ことを〈強行〉しようとした場合に、戦術レベルでどのような方策が可能かつ有効かを考えようとするものである。
- (9) 小論では〈語〉の定義をめぐる問題には立ち入らず、便宜的に次のような形で〈語彙素 (Lexem)〉を〈語〉として考えることとする。
 (語彙素とは)「具体的な実現形態としての語形 (⇨ Wortform) の基礎になっている抽象的な語彙単位で、例えば Haus—Hauses—Häuser—Häusern は語形の異なる五つの語であるが、一つの語彙的意味 (⇨ lexikalische Bedeutung) を共通にもつという点では一つの語彙素 |Haus| が状況に応じてさまざまな形に実現したものといえる。辞書の見出し語とはそうした語彙素を便宜的に表したものである。」(川島 S. 544)
 (原口註：〈Haus—Hauses—Häuser—Häusern〉は、本来は〈Haus—Hauses—Häuser—Häusern〉であるものと思われる)
 また小論では〈Die Zahl hat im Vergleich zum Vorjahr um ~ auf ~ zugenommen〉における〈im Vergleich zu〉、〈um ~ auf ~ zugenommen〉といったいわゆる熟語的表現も、これを一まとまりの定型的表現として身に付けてはじめてテキスト理解にとって有用な知識となるという点に加えて、記述上の煩雑を防止するという点からもこれを〈語〉に含めて考えるものとする。
- (10) Oehler は〈構造語〉として冠詞、代名詞、数詞、前置詞、副詞、接続詞を挙げている (Oehler S. 7)。
- (11) Oehler もまた「構造語は言語の中で出現頻度が最も高い。通常のテキストのほぼ半分は構造語から成り立っている」としている (Oehler S. 7)。
- (12) Neuner は〈coverage〉をドイツ語では〈Reichweite〉としている。
- (13) 〈理解可能性〉は日本の大学生がドイツ語を学ぶ場合、主として英語についての知識のドイツ語学習への利用に際して問題となる。英語語彙との類縁性とその活用はドイツ語語彙拡大の一つの有効な戦術となると考えられ、これについての適切な教育法が必要である。
- (14) 〈学習可能性〉は後に見る〈既有的知識ベース〉をめぐる問題と関連すると考えられる。
- (15) 〈マシュー効果 (Matthew effect)〉とは、マタイ伝福音書第25章29節の「すべて有て有る人は、^と與へられて愈々豊かならん。然れど有たぬ者は、その有て有る物をも取らるべし」(新約聖書 S. 55) に基づいて Merton が科学者の業績とこれに対する見返りの関係についての社会心理学的影響を論じるに際して最初に使用した概念である。Walberg & Tsai はマシュー効果の概念を教育学の分野に転用し、以前に受けた教育上の利益は現在の学習活動と学習動機にも影響を及ぼすことによって、この二つの要因以上に、学習成果に対して累加的に有利に作用する (Walberg & Tsai S. 371) としている。Walberg et al. は教育の領域におけるこのような因果的連鎖を「『マシュー』ないしは『累加的有利性』の効果 ("Matthew" or "cumulative-advantage" effects)」とし (Walberg et al. S. 92)、次のように述べている。
 「はじめに成功を取めた者は、そうでない者と比較して、そこでなし逃げたことに対してより頻繁に、あるいはより厚く報われているかもしれない。早期の知的及び動機上の元手は、より長期にわたって、より速く成長するかもしれない。そして大きな原資と並んで、情報と動機が高率で成長を継続することは、より厚く報われるかもしれない。かくして教育の分野での研究においては一般に一方通行の因果関係が想定されているのに対して、むしろ反射的ないしは互

恵的なあり方が因果関係のプロセスの自己達成あるいは自己強化を引き起こし、このことが教育と個人における生産性を決定する上で強く影響しているかもしれないのである。」(Walberg et al. S. 92)

Stanovich はこうしたマッシュー効果の考え方を更に言語習得の領域に適用している。

- 16) 準備教材例と接続教材例については後述。
- 17) 《原口1999》S. 68にも述べたように、〈訳読〉と〈翻訳〉は混同されることが多い。しかし両者は本来その性格と内容を異にし、授業にあたっては両者を分けて考えることが必要である。こうした視座からの文法訳読式授業克服の一つの優れた試みとして《太田》を挙げることができる。太田は「理解することと翻訳することを一纏めにして学生に要求を課してしまっていたことが、従来型の文法訳読式授業の最大の過ちと言える」(太田 S. 38)として、両者を区別した上で、〈訳す〉というプロセスを正面から取り上げ、〈翻訳〉という形でこれを授業に導入することによって文化相対的思考を育て、「論理的に話せる能力」や「説得力をもって自己の主張を展開できる能力」の育成をめざすべきである」(太田 S. 44)としている。
- 18) 《関口》S. 166 f. は推奨に値する良き一例であろう。
- 19) この問題はドイツ語という教科の枠を超えた学科目統合的な総合学習、そして更に大学教育のありかた全体の戦略目標策定の問題と関係する。この問題については更に稿を改めて考えることとしたい。
- 20) 大学の外国語教育をめぐる諸問題を鳥瞰し、その改革についての論点を整理して考える上で「理念・制度・教授法のなす三角形の図式」(上田 S. 40) はきわめて有益である。
- 21) 授業内容の具体的改善の努力を置き去りにした教育改革は、結果的にしばしば理念を一種の〈大言壮語〉化し、掲げた理念と日々の授業実践との間に大きな乖離を生む場合も少なくない。これは学習者の目には〈羊頭狗肉〉と映り、大学の外国語教育のみならず外国語を学ぶこと自体に対する不信感を植付け、学習動機にも否定的に作用する。
- 山本は「日本軍が同胞におかした罪悪のうちの最も大きなもの」として「『言葉を奪った』こと」を指摘している(山本 S. 303)。このことは今日の我々にとっても決して無関係ではありえない。自戒を込めて言えば〈国際化〉、〈情報化〉、〈外国語教育改革〉、〈コミュニケーション能力の養成〉、〈問題解決能力の育成〉などといった耳に心地良いことばを口にする時、これがかつての〈八紘一宇〉、〈大東亜共栄圏建設〉、〈撃ちて止まむ〉、〈必勝の信念〉といった一連のことばのように、単なる「抽象的かつ空文虚字の作文」(戸部 S. 287 f) ないしは「『吠え声』に等しい意味不明のスローガン」(山本 S. 304) と同じレベルで語られていないか良く考えてみる必要がある。こうした脈絡からも、改革や理念を語ることばは、様々な角度からこれを検証し、具体的な実現の方策との関係の中で常にその内実を問い続けなければならない。

参考資料

- Bimmel, Peter: LERNSTRATEGIEN im Deutschunterricht. In: Fremdsprache Deutsch 8, 1/1993, S. 4-11.
- Bohn, Rainer: Probleme der Wortschatzarbeit (Fernstudieneinheit 22). Langenscheidt Verl. 1999.
- 大学英語教育学会 (JACET): 第40回 (2001年度) JACET 全国大会要綱.
- Doyé, Peter: Lehr- und Lernziele. In: Bausch, Karl-Richard u.a. (Hrsg.): Handbuch Fremdsprachenunterricht. 2. unveränderte Aufl. Francke Verl. 1991.
- Freudenstein, Reinhold: Der rechte Weg: Vokabeln statt Grammatik. In: Bausch, Karl-Richard u.a. (Hrsg.): Erwerb und Vermittlung von Wortschatz im Fremdsprachenunterricht. Gunter Narr Verl. 1995, S. 63-72.
- Goethe-Institut: ゲーテ・インスティテュートのドイツ語検定試験. Goethe-Institut 1995.
- 原口厚: 今日の大学におけるドイツ語教育の目標設定とカリキュラムについて —— 中級授業改革の

- ための予備的考察として——。『文化論集』第13号, 早稲田商学同攻会 1998, 55-84頁
- 原口厚: 中級におけるドイツ語読解授業の設計について ——基本的考え方と授業例——。『文化論集』第15号, 早稲田商学同攻会 1999, 35-69頁
- 原口厚: 知識からことばへ ——ドイツ語読解教育における世界知識の活用について——。『文化論集』第17号, 早稲田商学同攻会 2000, 39-85頁
- 川島淳夫ほか編: ドイツ言語学辞典。紀伊国屋書店 1994。
- Krashen, Stephen D.: THE CASE FOR NARROW READING. In. TESOL NEWSLETTER Vol. XV, No.6, 1981, p. 23.
- 毛沢東: 実践論 認識と実践の関係——知と行の関係について。『毛沢東選集』第一巻。外文出版社 1968, 419-441頁。
- Merton, Robert K.: The Matthew Effect in Science. In. SCIENCE. Vol. 159 1968, pp. 56-63.
- Neuner, Gerhard: Lernerorientierte Wortschatzauswahl und -vermittlung. In: Deutsch als Fremdsprache. 2/1991. S. 76-83.
- 太田達也: 翻訳と外国語教育——「大学におけるドイツ語教育」という枠組みの中で——。『ドイツ語教育』6, 日本独文学会ドイツ語教育部会 2001, 35-46頁
- Oehler, Heinz: Grundwortschatz Deutsch. Ernst Klett Verl. 1966.
- Röhr, Gerhard: Erschließen aus dem Kontext Lehren, Lernen, Trainieren. Langenscheidt Verl. 1993.
- Scherfer, Peter: Lexikalisches Lernen im Fremdsprachenunterricht. In: Schwarze, Christoph u.a. (Hrsg.) Handbuch der Lexikologie. Athenäum Verl. 1985, S. 412-440.
- Schumacher, Helmut: Grundwortschatzsammlungen des Deutschen. Zu Hilfsmitteln der Didaktik des Deutschen als Fremdsprache. In: Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache. 1978, S. 41-55.
- 関口一郎: 「学ぶ」から「使う」外国語へ ——慶応義塾藤沢キャンパスの実践。集英社新書 2000。
- 塩田勉: 極端に遅い訳読, 或は文学的訳読について ——英語の場合——。『語学教育論集』8, 早稲田大学語学教育研究所 1993, 10-20頁
- 新約聖書: 旧新約聖書。日本聖書協会 1979。
- Stanovich, Keith. E.: Matthew effects in reading: Some consequences of individual differences in the acquisition of literacy. In: Reading Research Quarterly. Vol. XXI/No. 4, 1986, pp. 360-407.
- 杉谷眞佐子: 外国語学習と手続きの知識 ——異文化コミュニケーション能力を支える暗黙の知識について——。『ドイツ語教育1992』, 『ドイツ語教育』編集委員会 1992, 8-35 頁
- 竹内洋: 見えない教育効果/教育効果のアイロニー (教育のぞきめがね ②)。『大学進学研究』88号, 大学進学研究会 1994, 62-65頁
- 竹内洋: 会社主義というカリキュラム (教育のぞきめがね ⑦)。『大学進学研究』93号, 大学進学研究会 1995, 65-69頁
- 戸部良一ほか共著: 失敗の本質 日本軍の組織論的研究。中公文庫 1991。
- ボウグランド, R. de.・ドレスラー W. 共著/池上嘉彦ほか共訳: テクスト言語学入門。紀伊国屋書店 1984。
- 上田浩二: 理念問題の視点と課題。『語学教育論集』2, 早稲田大学語学教育研究所 1987, 33-41頁
- Walberg, Herbert J. and Tsai, Shinow-Ling: Matthew Effects in Education. In: American Educational Research Journal. Vol. 20, No. 3, 1983, pp. 359-373.
- Walberg, Herbert J. et al.: Exceptional Performance. In: Review of Educational Research. Vol. 54, No. 1, 1984, pp. 87-112.
- Wortschatz: In: Praxis des Neusprachlichen Unterrichts. 30. Jahrgang Nr. 1, 1983, S. 82.
- Westhoff, Gerard: Fertigkeit Lesen. (Fernstudieneinheit 17). Langenscheidt Verl. 1997.
- ウィルキンズ, D. A. 著/島岡丘 訳注: ノーショナル シラバス 概念を中心とする外国語教授法。

桐原書店 1984.

山内豊：読解における語彙の threshold level に関する実証的研究。大学英語教育学会第40回全国大会のシンポジウム「L2 読解に必要な語彙の threshold level を設定することは可能か」での配付資料。2001.

山本七平：一下級将校の見た帝国陸軍。文春文庫 1987.

米井巖：日本人ドイツ語学習者の為の基本語彙の選定要件。『ドイツ語教育1992』, 『ドイツ語教育』編集委員会 1992, 60-78頁

引用資料で言及されている参考資料

- Gougenheim, G. et al.: L'élaboration du Français Fondamental (1^{er} degré). DIDIER 1967, S.69-89.
- Jenkins, Joseph R. et al.: Learning Vocabulary Through Reading. In: American Educational Research Journal Vol. 21, No.4, 1984, pp. 767-787.
- Laufer, Batia: What Percentage of Text-Lexis is Essential for Comprehension? In: Lauren C. & Nordman M. (Eds.): From Humans Thinking to Thinking Machines. Clevedon, UK: Multilingual Matters 1989, pp. 316-323.
- Laufer, Batia: How Much Lexis is Necessary for Reading Comprehension? In: Arnaud P. & Béjoint H. (Eds.): Vocabulary and Applied Linguistics. Macmillan 1992, pp. 126-132.
- Landrieux, N.: Présentation des vocabulaires de base. II. Analyse structurale des vocabulaires de base. In: Cahiers d'allemand 12. 1977, pp. 16-25.
- Mackey, W. F. and Savard, J.-G.: THE INDICES OF COVERAGE: A NEW DIMENSION IN LEXICOMETRICS. In: International Review of Applied Linguistics in Language Teaching. Vol. V/2 - 3. 1967, pp. 71-121.
- Michéa, René: Vocabulaire allemand progressif. Paris 1959.
- Nagy, William et al.: Learnign words from context. In: Rading Research Quarterly. Vol. 20, No. 2, 1985, pp. 233-253.
- Pfeffer, J. Alan: Grunddeutsch. Basic (Spoken) German Word List. Grundstufe, Englewood Cliffs, N. J. 1964; ders., Grunddeutsch. Index of English Equivalents for the Basic (Spoken) German Word List Grundstufe, Englewood Cliffs N. J. 1965; ders., Grunddeutsch. Basic (Spoken) German Idiom List. Grundstufe, Englewood Cliffs N.J. 1968; ders., Grunddeutsch. Basic (Spoken) German Word List. Mittelstufe, Pittsburgh 1970.
- Raasch, A.: Neue Wege zu einem Grundwortschatz. In: Praxis des neusprachkicheim Unterrichts 19. 1972. S.235-244

教材例出典

朝日新聞

Frankfurter Rundschau

JAPAN magazin

Statistisches Bundesamt Deutschland のホームページ (<http://www.statistik-bund.de/basis/d/bevoe/bevoetxt.htm>) , (<http://www.statistik-bund.de/allg/d/veroe/d.bevoe.htm>)